



近代中国と日本人政治顧問・産業技術者

課題番号 14310172

平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)
研究成果報告書

平成17年3月

研究代表者 曾田三郎

(広島大学大学院文学研究科教授)



近代中国と日本人政治顧問・産業技術者

課題番号 14310172

平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)
研究成果報告書

平成17年3月



研究代表者 曾田三郎
(広島大学大学院文学研究科教授)

はしがき

清末以来、近代中国では多数の日本人が中央・地方の軍事組織、行政機関、教育機関、産業組織等に雇用されていた。これらの日本人は、中国の政治や経済に大きな影響を与えていた。しかし一部の著名な人物を除いては、これまでその経歴や雇用先での活動等は明らかにされてこなかった。この研究の目的は、第一にこれらの日本人政治顧問や産業技術者の個人データを発掘し、収集することにある。第二の目的は、このデータの中から、近代日中関係の歴史上において重要な位置を占めたと考えられる人物を抽出し、事例研究を行うことである。

これまでの近代日中関係史研究は、国家間対立に単純化され過ぎていた。そのために日本と中国の関係をめぐる多様な可能性や選択肢は、軽視されがちであった。近代の日中関係をめぐる近年の新しい研究動向は、これまで強調されてきた敵対・対立の局面のみならず、「提携」、「相互依存」、「競存」といった局面の存在も明らかにしつつある。こうした研究の動向は米国においてもみられ、清末の政治改革・教育改革をめぐる日本と中国の協調関係が明らかにされている。

中国の諸機関で雇用されていた日本人はもちろん日本の国家意思から自由であったわけではないが、個人の意思や活動を国家のそれによって代替させることはできない。事例研究の対象として注目した人物の一人は、有賀長雄である。清末において、彼は清朝が日本に派遣した憲政視察団に対して、明治憲政に関する講義を行った。また中華民国が成立するとともに、かれは法制局の顧問として招聘され、中華民国憲法の制定に関与した。彼が提示した憲法案の特徴の一つは立法府に対して行政府が優位に位置づけられていた点にあるが、もう一つの重要な特徴は地方制度に関する規定を盛り込んだことである。中国における憲法制定の作業は、清末の憲法大綱の発表から始まったが、第一次世界大戦後から作成された憲法案はいずれも地方制度に関する規定を含み、中央政府と地方政府の間の権限区分を行っていた。有賀の憲法案は、こうした第一次世界大戦後の中国の憲法案のさきがけをなすものであった。

中国で雇用されていた日本人に関しては、明治・大正期の事例がいくらか明らかにされているが、個別の事例であって、データの量的集積という面ではきわめて不十分である。この研究では、今後の近代日中関係史研究の発展に寄与するために、中国で雇用されていた日本人に関するデータの量的集積を行った。また服部宇之吉、有賀長雄等の人物を事例として抽出し、多様な可能性を秘めた近代日中関係の位相を示した。

研究組織

- 研究代表者：曾田三郎（広島大学大学院文学研究科教授）
研究分担者：頼 祺一（広島大学大学院文学研究科教授、平成 15 年度まで）
研究分担者：勝部真人（広島大学大学院文学研究科教授）
研究分担者：楠瀬正明（広島大学総合科学部教授）
研究分担者：水羽信男（広島大学総合科学部助教授）
研究分担者：中山富広（広島大学大学院教育学研究科助教授）
研究分担者：金子 肇（下関市立大学経済学部教授）
研究分担者：松重充浩（日本大学文理学部教授）
研究分担者：笹川裕史（埼玉大学教養学部教授）
研究分担者：丸田孝志（広島女学院大学生生活科学部助教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 14 年度	7,700	0	7,700
平成 15 年度	3,700	0	3,700
平成 16 年度	500	0	500
総 計	11,900	0	11,900

研究発表

(1) 学会誌等

平成 14 年度

- 曾田三郎「清末の預備立憲和日本人」『辛亥革命史叢刊』第 11 輯、2002 年 9 月
松重充浩「興亜院の成立と在『満洲』日本人社会」、本庄比佐子ほか編『興亜院と戦時中国調査（付）刊行物所在目録』岩波書店、2002 年 11 月
松重充浩「国立国会図書館所蔵明治期（1907 年 11 月 3 日～1912 年 7 月 31 日）『満洲日日新聞』モンゴル関係記事名録・解題」『史滴』第 24 号、2002 年 12 月

平成 15 年度

- 曾田三郎「海外政治視察団の派遣決定過程と日露講和問題」『広島東洋史学報』第 8 号、2003 年 11 月
曾田三郎「清末の憲政準備と日本での官制改革論」、孫文研究会編『辛亥革命の多元構造』汲古書院、2003 年 12 月
中山富広「広村古文書からみた近世村落像」『芸備地方史研究』第 235・236 号、2003 年 4 月

金子 肇「近代中国政治史研究と文書史料—中華民国期を対象に—」『史学研究』第 240 号、2003 年 6 月

平成 16 年度

勝部真人「地域における文明化の位相—出雲地方の散切頭を事例に—」、頼祺一先生退官記念論集刊行会編『近世近代の地域社会と文化』清文堂、2004 年 3 月

楠瀬正明「二十世紀初期における中国の国会速開請願運動（一）」『地域文化研究』（広島大学総合科学部紀要 I）第 30 巻、2005 年 2 月

水羽信男「中国知識人の問いかけ」、布川弘ほか編『制度と生活世界』培風館、2004 年 5 月

水羽信男「昆明における抗戦とリベラリズム」、石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会、2004 年 12 月

水羽信男「中華民国後半期（1928—1949）政治史研究綜述」『地域文化研究』（広島大学総合科学部紀要 I）第 30 巻、2004 年 12 月

中山富広「近世後期地域市場の一断面」、頼祺一先生退官記念論集刊行会編『近世近代の地域社会と文化』清文堂、2004 年 3 月

中山富広「近世後期における豪農商の経済倫理と地域社会認識（上）」『芸備地方史研究』第 243 号、2004 年 10 月

金子 肇「善後会議における中央と地方—臨時執政政府の改組をめぐって—」『近代中国研究彙報』第 27 号、2005 年 3 月

松重充浩「『満洲日日新聞』（1913—14 年）モンゴル関係記事名目録・解題」『NEWS LETTER』第 16 号、2004 年 12 月

笹川裕史「糧食・兵士の戦時徴発と農村の社会変容」、石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会、2004 年 12 月

笹川裕史「重慶戦時糧食政策の実施と四川省地域社会」、中央大学人文科学研究所編『民国後期中国国民党政権の研究』中央大学出版部、2005 年 3 月

丸田孝志「抗日戦争期・内戦期における中国共産党根拠地の象徴—国旗と指導者像—」『アジア研究』第 50 巻第 3 号、2004 年 7 月

(2) 口頭発表

平成 14 年度

勝部真人「防長米改良に関する史的考察」社会経済史学会中四国支部会大会、2002 年 11 月 2 日

金子 肇「近代中国政治史研究と文書史料—中華民国期を対象に—」2002 年度広島史学研究会大会シンポジウム、2002 年 11 月 9 日

松重充浩「清末民初中国東北地域におけるモンゴルプレゼンスについて」日本大学史学会、

2002年6月29日

笹川裕史「重慶政府統治下における糧食と兵士の徴発」東方学会主催第47回国際東方学会
会議シンポジウム〈日中戦争時期の重慶国民政府〉、2002年5月17日

平成15年度

曾田三郎「海外政治視察団の派遣決定過程と日露講和問題」〈二十世紀中国的戦争與社会〉
学術座談会（中央研究院近代史研究所）2003年9月24日

勝部真人「出雲地方における文明開化の諸相」広島史学研究会大会日本史部会、2003年10
月26日

水羽信男「昆明における民主主義運動」（財）日中友好会館日中友好交流計画歴史研究支援
事業国際シンポジウム〈重慶国民政府の歴史的 position〉、2003年3月9日

水羽信男「抗日戦争と昆明の自由主義者」〈二十世紀中国的戦争與社会〉学術座談会（中
央研究院近代史研究所）2003年9月24日

水羽信男「日本中国近代史研究現状」中国社会科学院近代史研究所革命史研究室主催学術
討論会、2003年12月23日

中山富広「瀬戸内一村落からみた地域市場」広島近世近代史研究会、2003年3月3日

中山富広「広島藩農民身分に関する一考察」広島近世近代史研究会、2003年9月29日

笹川裕史「糧食と兵士の徴発」（財）日中友好会館日中友好交流計画歴史研究支援事業国際
シンポジウム〈重慶国民政府の歴史的 position〉、2003年3月10日

丸田孝志「太行・太岳根拠地のセレモニーと民俗利用」抗日戦争研究会、2003年4月19
日

平成16年度

曾田三郎「中国の立憲改革と大隈重信の『封建』論—他国の政治改革をめぐる自国史認識—
」国際日本文化研究センター共同研究会、2004年6月26日

曾田三郎「清末・民初の立憲改革と日本の早稲田大学」蘇州大学歴史文化学院講演会、2004
年11月22日

勝部真人「明治期における西洋農学の地方的受容について」北京農業博物館東アジア農業
史シンポジウム、2004年11月22日

中山富広「近世日本の国制と公儀領主制」国際日本文化研究センター共同研究会、2004年
7月18日

金子 肇「孫文の統治構想と行憲体制、人民共和国の統治形態」〈1949年前後の中国:その
政治・経済・社会構造の断絶と連続〉国際シンポジウム、2004年12月11日

笹川裕史「糧食の徴発から見た49年革命の位置」中国現代史研究会例会、2004年9月25
日

丸田孝志「抗日戦争期・内戦期における中国共産党根拠地の象徴—国旗と指導者像—」中

国近代史研究会、2004年7月24日

丸田孝志「中国共産党の民俗・象徴・セレモニー」中国政党研究会、2004年11月6日

丸田孝志「中国共産党根拠地の時間・象徴・民俗—1940年代の太行・太岳根拠地を中心に—」財団法人交流協会 2004年度プロジェクト<政党—社会関係からみた中国近現代史の再構成>、2005年1月29日

(3) 出版物

平成14年度

曾田三郎ほか共訳『中国抗日戦争史—中国復興への路—』桜井書店、2002年11月

はじめに

清朝の官僚たちの間における立憲政体採用の提起は、1904年から始まった。これ以前から張謇などは、立憲政体の採用を袁世凱や張之洞に働きかけていたが、君主への上奏は当時のフランス駐在公使孫寶琦がはじめて行った。ついで袁世凱、張之洞等が立憲政体への移行を求める上奏を行ったが、これから間もなく諸外国へ政治視察団が派遣されることになった。帰国した載澤、端方等の視察大臣は、立憲国家の政治の実状を報告するとともに、立憲政体の採用を求める上奏を行った。これを契機に、立憲政体採用の是非が清朝中枢で協議されることになり、1906年9月（光緒32年7月）立憲政体への移行のための準備に着手することが決定された。

中国の立憲政体への移行と、そのための準備として着手された官制の改革には、日本の政府はもとより、多くの民間人も注目した。日本政府内部では、中国にある公使館や領事館を通じて外務省が情報の収集にあたった。日本政府の関心は中国に対する影響力の維持・拡大にあり、中央や地方の政界での動向に対する情報収集を積極的に行った。だがここでは、清朝の憲政準備に対する日本政府の関与については取り上げない。この論文が分析の対象とするのは、中国の立憲政体移行に関する個々の日本人の言論である。そのなかには大隈重信のような明治の政治指導者も含まれているが、それ以外には、清末から中華民国初期にかけて、中国で雇用された日本人教師や顧問がいる。具体的には、清末に京師大学堂総教習として雇用された服部宇之吉や、中華民国初期に大總統府の法律顧問に就任した有賀長雄と彼に随行した青柳篤恒である。

彼らは中国からの留学生や視察団への講義・講演、外国人教師としての雇用、政府の顧問への就任等のかたちで、中国との間で具体的な関わりをもっていただけでなく、『国家学会雑誌』、『外交時報』等の学術雑誌や『太陽』、『日本及日本人』等の総合雑誌上で、中国での憲政導入に関する論評をしばしば発表していた。彼らは日本の明治維新以来の政治を参照して論評するという共通した姿

勢で臨みながらも、中国での憲政導入に対してそれぞれ個性的な見解を示していた。

いうまでもなく清末において憲政の導入は実現するに至らなかったが、1913年4月に中華民国最初の国会が成立すると、6月には衆参両院からそれぞれ30名の起草委員を選出し、憲法起草委員会を組織することが決定された。投票の結果、国民党の24名を最大多数として、合計60名の起草委員会が組織された。起草作業は翌月から始まったが、この年の10月末日に憲法草案が完成し、翌日に憲法会議に提出された。これが天壇憲法草案である。この天壇憲法草案の起草に対抗するかたちで、大総統府内には陸宗輿、曹汝霖、章宗祥ら6人による憲法研究会が設置されたが、これに参加したのが日本から大総統府の法律顧問として雇用された有賀長雄である。清末の憲政視察大臣への憲政講義から中華民国初期の大総統府内の憲法研究会への参加まで、有賀は中国の立憲改革に一貫して関与していたのである。

1. 憲政導入準備に対する大隈重信の言論

大隈重信は日本の著名な政治家であり、あらためて紹介する必要はないかと思うが、ここでの論述に関係する必要最小限の経歴のみを述べておく。中国で憲政導入の準備が始まった頃の彼は、憲政本党総理という立場にあった。彼は政党内閣の創始者としても知られ、はやくから政党内閣制と国会の即時開設を主張していた。彼のよく知られているもう一つの経歴は早稲田大学の創始者であるという点であり、1907年に一度政界を引退した後、早稲田大学総長に就任した。また載澤らの海外政治視察団が来日したとき、伊藤博文と同様に、彼も憲政について語る機会をもった⁽¹⁾。

中国での憲政導入準備に関する大隈の言論は、1906年頃から見ることができる。この年の9月1日に、清朝は立憲準備の上諭を宣布したのであるが、その翌月に発行された『太陽』の第12巻第13号(明治39年10月)に、大隈は「清国憲政創設の議」という論文を発表した。『太陽』は1895年に創刊された日本最初の総合雑誌である。大隈の論文が掲載されたのは、立憲準備の上諭宣布からまもなくのことであり、彼が中国での憲政導入に強い関心を抱いていたこと

が推測できる。またこの論文は「清国創設憲政論」という題名で漢訳され、同誌の同じ号に掲載されていたから、日本に在住する中国人に対する意見表明も意図して執筆されたものであることがわかる。

この論文のなかで大隈は、清朝が憲政導入準備を決定する上で大きな役割をはたした海外政治視察大臣の帰国報告を、次のように解釈していた。この国を救うには政体を変更して憲政をしく以外にはなく、世界の大勢にしたがって国民の政府をつくり、国民の代議士を集めて国民の意思を統一する以外に途がない。ここからわかるように、大隈は大臣たちの帰国報告を代議制の導入による国民の統合という面に力点をおいて理解していたのである。ただし大隈は代議制採用の前提として、中央集権の必要性を強調していた。

彼は日本の明治維新以来の経験に言及し、軍事権や財政権のみならず、地方行政も内務省に集中したことを強調し、中国でもまず中央集権に着手すべきことを提言している。大隈の中央集権の必要性についての認識は一貫しており、日本の政治・法律視察のためにやってきた清朝の官員を前にした演説で、やはり日本での軍事権や財政権の中央への集中の経験に言及した後、中国でも「中央集権を強行し、憲法政治実施の根本」を整える必要があることを指摘していた⁽²⁾。

大隈の立論では、中央集権は憲政導入の前提であり、中央集権が実現した後、中央に集中された諸権限の一部は委任という形態で地方に移管される。それがたとえば地方自治制として具体化するわけであるが、代議制の導入はここではじめて可能になる。大隈は1906年の時点ですぐに代議制を導入すべきことを説いていたわけではないが、中国での憲政導入の意義について、彼は代議制を媒介とする国民の統合や愛国心を強調していた。

大隈が中国での憲政導入準備をめぐって発表したもののうち、最も長編に及ぶのは「日本政党史論」である。これは『太陽』の第12巻第14号(明治39年11月)から第13巻第4号(明治40年3月)にかけて、4回に分けて掲載された。この「日本政党史論」は、日本にいた中国人留学生が組織した政法学会の要請で行った講演の記録で、中国での憲政導入準備に参考になることを目的としたものであった。掲載にあたって大部分は漢訳されており、中国人への影響が明らかに意図されていた。大隈は第12巻第16号に掲載された部分で、ヨーロッ

パ諸国での憲政導入と政党発生の歴史を振り返り、それらは比較研究という意味ではともかく、学ぶという意味では役に立たないことを指摘している。他方で日本については、道徳の本源や習慣の共通性、それに歴史の親近性を指摘し、中国での憲政導入準備にあたっては、日本に学ぶことが有益であることを強調していた。第13巻第4号の部分でも、日本の憲政をまねることを勧め、日本が西洋文明の真意を咀嚼して東西文明を調和させ、短期間のうちに世界の強国に成長したことを誇っていた。

第13巻第2号までの掲載分の内容は、大部分が文字どおり日本の政党の歴史に関するものであるが、最後の第13巻第4号において、大隈は中国での憲政導入準備に直接論及している。この部分で大隈は、昔と異なる現在の国際競争の一般的特徴を、国民間の競争としてとらえている。このような観点から、大隈は現在の中国やロシアを「小国」と見なし、日露戦争は、開戦の動機が国民にある「大国」日本とそれが一部の権力者にある「小国」ロシアとの戦争であると見なしている。大隈にとって「大国」と「小国」の区別は国民の統合度であり、国土の広狭や人口の多少にあるわけではなかった。

大隈は「大国」の基準である国民統合を実現するために、中国での君主制の維持も勧めるが、すでに言及した彼の論文からもわかるように、彼にとって国民統合実現の最大の制度的保証は憲政であった。憲政をめぐる彼の立論の構成要素を羅列すると、「政府は国民の政府」、「君主の施策はひとえに国民の意思に従う」、「政党は国民の意思を代表して運動」、「多数意思を代表する政党による組閣」、「君主による拔賢委権の難の解決」ということになる。ここからわかるように、大隈は憲政の内容について、統合の象徴としての君主の下における政党政治の実現を主張していたのである。

ただ大隈は、政党を無条件で認めているわけではなかった。彼は中国で憲政を導入するにあたって、「学問党派」と「地方党派」は認めてはならないと、講演に集まった留学生たちに強調していた。後者の内容はその名称からおおよそ類推できるが、大隈は各省の利害に基づく政党の出現を、国家の分裂という観点から避けるべき「最要」の課題としていた。前者はイギリス、フランス等、世界の種々の政治学説を基に結集する政党のことを意味しており、これも国家の混乱を招来するという理由で、排除の対象とされている。それではどのような政

党が必要なのか。この点についての大隈の議論は抽象的であり、「国是」を共通にする政党、あるいは国家の利害を基本とする「公党」ということになる。

大隈においては、国家の基本方針をめぐって争う政党の存在は想定されておらず、基本方針を共通にすることを前提として、諸政策の緩急を競う二大政党制の採用を留学生たちに勧めていた。こうした考えの基礎には、日本の政界で政党の指導者として活躍してきた彼の経験があったのであろう。大隈は、第12巻第16号に掲載された部分で、明治14年の政変で政府を追われた後の立憲改進黨の創設に言及していた。立憲改進黨より少し前に創設された板垣退助の自由党との関係について、大隈は「主義・観点は、大同小異であり」、ただ改進黨が穏健的で、自由党が急進的であるという緩急の違いがあるだけだとしていた。また後には、憲政本党を創設してその党首となり、伊藤博文系の立憲政友会と競いあったが、大隈はこのような二大政党制を、留学生たちに勧めていたのであろう。

中国での憲政導入準備をめぐる大隈重信の言論は、中央集権を前提に、代議制と政党内閣によって国民の統合を図るというものであった。それはいわば大隈自身が日本の政界で追求してきた課題でもあったのであり、同様の課題を中国でも実現するように留学生たちに求めたのである。このことは反対に言えば、日本にはない中国固有の条件などは考慮されなかったということでもある。

2. 服部宇之吉の官制改革論

服部宇之吉は後の東京大学の哲学科を卒業した後、教育行政や高等教育に携わった。彼が中国と関わりをもつようになるのは、東京の高等師範学校教授から帝国大学に転任した頃で、1899年に中国に留学し、義和団事件に遭遇した。1902年には京師大学堂師範館総教習に就任するために北京に赴き、1909年まで足かけ7年間滞在した⁽³⁾。

服部は大隈と違って学者であり、しかも長い間中国に滞在していただけに、中央集権の必要性を否定しないものの、それが容易ではない現実をよく理解していた。中国から帰国した服部は、『国家学会雑誌』の第23巻第6号（明治42年6月）から第24巻第2号（明治43年2月）にかけて、連載が4回におよぶ長

篇の論文「清国ノ立憲準備」を発表した。彼が中国を離れたのは1909年1月であるが、光緒帝・西太后の相つぐ死去と袁世凱罷免の直後である。したがってこの論文には、光緒期の憲政準備に関する彼の観察がまとめられていると考えてよい。

この論文の第23巻第6号に掲載された部分で、服部は1906年9月から10月にかけて行われた官制改革案作成の編纂作業についてふれているが、そのなかで「官制改正ニ就キテノ難関ノ一ハ中央集権問題ナリキ此問題ニ就キテハ委員間ニ激論有リ殆ド破裂ヲ見ントシテ漸ク事無キヲ得タリ」と、憲政準備にあたっての中央集権的官制の編成がたいへんな難関であり、載澤、鉄良、徐世昌、袁世凱等で構成される編纂委員の間で鋭い対立が生じたことを指摘していた。大隈が示唆したように中央集権的制度の樹立を強制する、そのような力が中央の側にあるのであればともかく、そうではなく協議によってそれを実現しようとすれば、さまざまな矛盾・対立が生じるのは当然のことであった。

実際に、意見の対立から、当初予定されていた地方官制の改革は先に延ばさざるを得なかった。それだけではなく、中央集権のための制度的保証を実現する上での難題は、中央官制それ自体のなかに多々あった。難題を生み出している根本的な要因は、中央の官制自体が集権的性格を欠いていたことである。中央の諸機関はそれぞれに分立しており、それを統轄できるのは唯一君主のみであるのが現状であった。立憲政体への移行にあたって、中央官制の面で必要とされた改革は、こうした状態を改めて統一的な行政府を編成することであったが、この課題さえも、1906年の官制改革では実現できなかったのである。

1906年の官制改革の結果について、服部は「当初ノ目的ノ大半ヲ棄テ僅ニ其ノ一部分ヲ達セルニ過ギズ」（第23巻第6号）と述べていた。中央における統一的行政府の編成さえも実現しなかったが、中央と地方の関係の調整はそれ以上に困難な課題であった。中央集権化という立場からの地方官制改革の難題は、各省督撫が中央諸機関と並立しており、君主に直隷していたことである。当時、『大清憲法草案』を発表するなど、中国の立憲改革に強い関心を示していた北鬼三郎は、地方督撫が中央諸機関と並立して君主に直隷し、独自の上奏権を行使している現状について、「是れ行政の統一無き所以の原由なり」と指摘し、行政の統一性・集権性を阻害している根本原因であると見なしていた。このよう

な観点からすれば、憲政導入の前途をさえぎっている主因は「督撫の権限過大」なことにあり、したがって「地方制度の改革は立憲の先決問題」と位置づけられるのは当然のことであった⁽⁴⁾。

大隈ほど直截かつ安易に述べていたわけではないが、服部も中央集権の必要性を認めていた。北鬼らが克服すべきであるとした地方督撫の強力な権限を支えていたのは、以上のような官制という制度上の要素のみではなく、歴史上の事実の蓄積という要素もあった。北鬼は先の同じ論文の中で、清朝の軍権は白蓮教徒の反乱のときから「下移の端を啓き」、太平天国のときに一層進行し、督撫による外交権の保持は「軍権下移に伴ふ自然の墮勢」であるとしていた。北鬼は直接には言及していないが、財政権についても同じような分析が可能であろう。

地方督撫の権限強化は、いわば制度が可能にし、歴史が現実のものとしていたのであるが、この結果生じた現状を、服部は第 23 巻第 7 号に掲載された部分で次のように述べていた。

従来支那ノ政府ハ中央ニ集権ノ力無クシテ、地方ニ分権ノ実アリ。中央政府ハ法ヲ制シ章ヲ定メテ発布スルモ、其実施ハ一ニ地方長官及ビ地方官ノ手ニ歸ス。即チ地方長官等ハ財源ヲ其所轄地方ニ求メテ、法ニ遵ヒ章ヲ按ジテ之ヲ施行ス。中央政府ノ自ラ経営スル事業ハ京師ノ地ニ於テ之ヲ見ルノミニテ、地方ニ至レバ一モ中央政府ノ直接経営ニ属スル事業ヲ見ズ。故ニ中央政府ハ立法ノ権ヨリ云ヘバ権力天下ニ及ブモ、実行ノ権ヨリ云ヘバ権力僅ニ京師に限ラル。

服部のこの指摘は、政策の立案権は中央にあるが、その執行権は地方にあるという中国の政治の状態を示している。清代の政治の実状が常にこのようであったというわけではないが、このような状態が生じる制度上の根拠はあった。そして服部が見聞した政治の現実も、まさにこのようであった。

このような現実を前提として、服部は連載の最後の第 24 巻第 2 号において、中央集権のための具体的な方法を、以下のように提示している。

中央集権ノ実ヲ挙ゲントセンニハ、従来督撫ノ一身ヲ以テ統轄シタル文武ノ政務ヲ分割シ、財政ハ度支部ニ、司法事務ハ法部ニ、軍事ハ陸軍部ニ、教育事務ハ学部及ビ民政部ニ、鉄道鉱山船舶等ハ郵伝部ニ帰シ、各々中央ノ直轄ト為シ、各々中央ヨリ官吏ヲ派遣シ、督撫ノ管掌ヲ脱離セシムルコトトナルベシ。

理論上はまさにこのとおりであり、彼は袁世凱の北洋新軍指揮権の陸軍部への移管を中央集権の端緒として評価していた。しかし各地方社会の多様性という問題はここでは視野に入れないで、中央財政の負担と人材の確保という面のみから考えても、こうした執行権限の地方から中央への移管が現実的可能性と意義を持ちえたかは、それほど簡単に解答が出せる問題ではない。

中国での憲政導入準備に対して、同時代の日本人の多くは、中央と地方が対等に規定されている官制や各省督撫の権限強化という歴史的現実を批判し、中央集権の必要性を強調していた。しかし少数ではあれ、地方権限の強さをやむをえないもの、あるいは必要なものとして容認する議論が無いわけではなかった。

周知のように、民間での3回にわたる国会の即時開設を求める請願運動の結果、国会開設までの準備期間を短縮し、宣統5年(1913年)に国会を召集することになった。これにともなって国会召集までの準備作業の見直しが行われ、1910年に内閣官制を制定し、翌年には内閣を設立するとともに、内外の官制を公布することになった。この新たな準備作業案にしたがって1911年5月に設立されたのが、よく知られている「皇族内閣」である。この内閣の設置は、日本での官制改革をめぐる議論を再び活発にすることになった。

この「皇族内閣」の成立をめぐる、当時の日本ではそれが責任内閣に相当するのか否かを中心に議論が展開した。だがこの「皇族内閣」の設立で、官制上の準備が終了するというわけではなかった。先に言及したように、服部は1906年の官制改革が難題にはほとんど手をつけなかったことを指摘した。彼はこの1906年の改革に続いて「第二次ノ官制改革」が必要であることを指摘し、それは「第一次ノ改正ニ於テ決セザリシ内閣設置、中央集権、地方官制等ノ諸問題ヲ解決スルヲ要シ、事態ノ重大ナルコトハ第一次改正ノ比ニアラザルベシ」と、

述べていた（服部前掲論文、『国家学会雑誌』第23巻第6号）。服部がここで指摘している三つの問題のなかで、後の二つは密接に関連している。

地方官制の改革は、辛亥革命までに実現することはなかったが、服部も含めて、当時の日本人の多くは地方権限の削減を主張していた。だが日本人のなかには、これと趣旨を異にする意見がないわけではなかった。「皇族内閣」への論評を意図して発表されたある論文は、督撫の権限については慎重な対処が必要であることを指摘しつつ、「元来清国の如き国情の下にあって総督巡撫等の権限が他邦の其れより大なるは、蓋し止むを得ざる次第であるが、今其の権限を縮小し其の地位を貶して、果して管内の秩序安寧を保持することが出来るであろうか、危いものである」と⁽⁵⁾、述べていた。

大隈は政党指導者という立場からではあるが、日本の経験を参考に中央集権を強く主張していた。服部は学者として清朝の現官制を詳細に分析し、その困難性を自覚しつつも、やはり中央集権の必要性を指摘した。それに対してこの論文は、地方督撫の権限の強さの合理性と必要性を指摘しているのである。

3. 有賀長雄と青柳篤恒の立憲政体論

有賀長雄は服部と同様に東京大学の哲学科を卒業し、枢密院書記官等の行政官を歴任するとともに、早稲田大学で社会学や国際法の講義を担当した。明治政界のなかでは伊藤博文や伊東巳代治と近かったようで⁽⁶⁾、清朝が憲政視察大臣を日本に派遣してきたとき、伊東の依頼で、達壽と李家駒に対して、1908年から翌年にかけて60回におよぶ憲政の講義を行った。また後で取り上げるように、中華民国成立後には大総統府の法律顧問に就任し、憲法の編纂作業に関わった。

青柳篤恒は早稲田大学の出身で、清国留学生部の教務主任兼主事等を担当したが、後には同大学政治経済学部教授になり、軍部との関係が深かった。有賀とは密接な関係にあり、法律顧問に就任する有賀とともに中国に行った。

すでに詳しく論じたように⁽⁷⁾、有賀は達壽や李家駒への憲政講義において、「責任内閣」の樹立の必要性を強調していた。中国での憲政導入準備をめぐる彼のこうした立場は、憲政視察大臣への講義だけでなく、日本での雑誌論文上

でも表明されていた。中国での憲政導入にあたって必要な準備事項を、彼は三つに大別していた。第1は皇位継承の確定、第2は責任内閣の確立、第3は国会や地方議会の開設である⁽⁸⁾。そこでまず、第2の問題に関する彼の所論から検討することにしよう。

彼は現在の制度の下での清朝の政策のあり方を、次のように分析している⁽⁹⁾。国策の立案に関わる軍機大臣等の人選にあたって、現在の制度の下では「人格のみを標準」とし、その人の「主義方針」は重視されない。そのために、政策の立案にあたって意見が一致する保証がない。必ずしも意見が一致しないために、最終的な取舍選択は君主の手に委ねられる。ここまでの分析は、中央での諮詢機関の構成員、行政執行機関の長官、それに地方の長官が個別に君主に直隸し、君主は最終的意思決定を求められるという、君主親政の政治のあり方をよく示している。

こうした君主親政の結果、どのような問題が生じるのか。失政があったとき、建議した臣下も当然責任を免れないが、「之を採納したる君主又は摂政は自ら直接の責任者と為らざるべからず」とし、失政が生じるたびに民の非難が朝廷に集中することを、彼は懸念していた。こうした問題を回避するために、彼が提唱するのが「責任内閣」の樹立である。この「責任内閣」制においては、施政の方針を定めるのは総理大臣であり、この方針にしたがう人物を各部の行政長官として採用し、内閣を構成する。その結果、「中外に向て統一の行動を為す」ことになるのである。それでは、君主は如何なる位置を占めることになるのか。君主は「大々的の国是」を定めた後は、施政を総理大臣や内閣に委ねることになる。「大々的の国是」の内容としては、「立憲の政を布く」といったことがあげられている。すなわち通常政治運営に君主が関わることは、想定されていないのである。

彼は総理大臣の強い指揮権の下に、各行政機関の長官が国务大臣として参加し、連帯責任制で運営される内閣を構想していたのである。一方、地方官制の問題については、非常に独創的な考えを持っていた。すでに言及したように、各省の督撫は中央各部の長官と同等で君主に直隸し、強い権限を有していた。有賀はこの督撫の地方への配置について、中国の国土の広さや地方の多様性からして、今後ながく変更はできないと見なしている。そのことを前提として、

有賀は「立憲政体の精要たる責任内閣の制度」との調和を求め、中央各部長官と督撫との権限調整および督撫の閣議への参加を主張している⁽¹⁰⁾。もちろん督撫の閣議への参加方法など、具体的には解決の困難な問題も多いが、有賀の所論の重要な点は、大隈などと異なって、日本の中央集権制の単純な採用は主張しなかったことである。

有賀の所論が大隈と異なるもう一つの点は、内閣の国会に対する優位を指向し、政党内閣を主張しなかったことである。大隈の言論と比較した以上2点の有賀の所論の特徴は、彼の議会制導入論にも反映されていた。有賀は憲政導入準備に関わる第3の事項として、議会制の採用をあげていた。だが彼は、国会の開設は急がなかった。その理由は、「行政事務の一大部分」は各省督撫が管轄するという彼の認識にあった。もちろん彼も、全国一律に施行される法の制定を担う国会の必要性を認識していなかったわけではない。しかし議会制導入の優先度からいえば、各省督撫が担う行政に関して、「民意を察し経費に備ふるの機関」としての地方議会のほうが高かった。彼の案は、まず地方議会を開設して人民を立憲政体の運用に慣れさせ、一定期間が経過した後国会を開設し、議員を地方議会から選出させるというものであった。そして国会開設までの期間、立法は官吏と勅選議員で構成する組織が担当することになっている⁽¹¹⁾。

ところで1907年10月、国会開設に先立って、各省の立法機関である諮議局の開設命令が出された。こうした憲政準備の推移をふまえて、有賀に近い立場から諮議局の権限等を論じていたのが、青柳篤恒である。彼は中国のような広大な国での憲政採用は未曾有のことであるとして、特殊条件を考慮に入れる必要性を、まず指摘している。そのうえで地方議会＝諮議局の権限の拡大を提起している。彼の論述によれば、諮議局は「一省に関する政務」のほとんどを議決し、「国家全体国民全体に関する最重最大の少数議案」に限って、国会での審議に委ねることになる⁽¹²⁾。彼は各省の立法権を、最大限に認める考えを提示していたのである。

現在の中国の分権的状态を批判し、何よりも中央集権の必要性を強調する大隈などは、分権の一層の拡大を提唱する青柳のような考えを、許容することはできなかった。青柳の論文が掲載された『外交時報』の次の号には、大隈の口述による「清国憲政準備先決問題」が載せられた(第127号、明治41年)。この

なかで大隈は、「現在の分権」を中央集権に一変させること、それに中央議会を開設することの必要性をあらためて指摘し、「若し各省に別々の憲法を布き、以て聯邦の形勢を為さんと欲すと言はゞ亦何をか言はんや」と、各省の権限拡大などはおよそ考えられないことだとしていた。1907年の上諭に続いて、翌年7月には諮議局章程や同選挙章程が公布され、次の年から各省に諮議局が開設されることになったが、この諮議局の開設は服部宇之吉などにも、中国が連邦制に傾斜するのではないかという疑念を抱かせることになった⁽¹³⁾。

青柳は省憲法の制定や連邦制を直接に語ってはいたわけではないが、中国での連邦制の採用を主張する人が、当時の日本人のなかにはかなりいたことは事実である⁽¹⁴⁾。中国での憲政導入の準備を、中央・地方関係という視点で見たとき、当時の日本人の議論で一つの焦点となったのは議会制の採用をめぐる問題である。大隈のような考えからすれば、当然、中央議会の開設が先行することになる。だが中国の特殊事情を考慮しようとする日本人の間では、地方議会先行論もあった。

たとえば衆議院議員であった犬養毅は、中国の「四千年來の歴史と地方自治の沿革」に基づき、まず地方議会を開設して、そこでの政治経験の蓄積を経て中央議会を開くことを提唱している。同じ衆議院議員の竹越與三郎も、まず湖北や直隸で地方議会を開設すべきことを主張していた。この竹越の議論について注意しておかねばならないのは、中国での政治改革に対する単なる評論だったわけではないことである。彼の主張は、憲政視察大臣達壽の来日に対応して提示された。やはり達壽の来日に言及し、彼から意見の聴取を受けたとする衆議院書記官長の林田亀太郎は、中国が日本の議会制度をまねるのは「大きな誤り」とし、犬養や竹越と同様に、まず一、二省の地方議会から開設し、最後に中央議会を開設すること提案している。

また早稲田大学で教鞭をとり、清国留学生部でも授業を担当していた政治学者の浮田和民は、中国にとって日本の憲法は参考にならないとしたうえで、議会制の採用については、竹越と同様に、直隸等の比較的進んだ省から地方議会を開設し、その全国的整備がすんだ後に中央議会を開設することを提案している。浮田のこの議論はここからさらに進み、各省での憲法制定と、その憲法の範囲内での立法・行政・司法三権の行使を提示している。また浮田以外にも、

「清国固有の歴史を蔑視せず、清国固有の国是に悖らない」憲政樹立の方策として、連邦制を採用して各地方が独自の憲法を制定し、その上で全国を統轄する憲法を制定することを提唱している法学者がいた。

4. 中華民国憲法草案の起草と有賀長雄

清末の憲政準備の開始にあたって、しばしば明治維新以来の日本の経験の参照を求めていたように、大隈重信は 20 世紀初頭の日本の到達点に対して強い自信を抱いていた。大隈は日露戦争のさなか、早稲田大学清韓協会で演説を行った。

この清韓協会での演説は、1904 年 10 月 27 日から 30 日の『報知新聞』に「大隈伯対清意見」として連載された。その最初の 27 日付に掲載された分に、「露国は根の枯れた巨樹」という小見出しのついた部分がある。そのなかで大隈は、日本が封建制度の弊害を改め、憲法を定めて自由を尊ぶ近代の国家組織を形成した点を指摘して、日本を進化の適者に位置づけ、反対にロシアを不適合者であるとみなしていた。そして実際に進行している日露戦争において、ロシアが勝てないのは「進化の理法」から見て当然であると断言していた。ロシアとは異なって、日本が適者として生存できると強い自信をもって指摘した大隈は、その理由の一つとして、明治維新以来の中央集権の実現を指摘していた。大隈は憲政の導入への準備に着手した中国に対して、日本を模倣することをしばしば勧めていたが、その場合の具体的な対象もやはり中央集権化であった。

だが同じ早稲田大学のなかでも、中国の立憲政体下での行政制度について、大隈とは異なった考えを持っている人物もいた。その 1 人が有賀長雄である。清末の憲政準備に関する有賀の考えは、1908 年 1 月に来日した憲政視察大臣に対する講義と『官制篇』によって知ることができる。達壽や李家駒といった憲政視察大臣を相手に行った講義や『官制篇』で示された、立憲政体下での中国の行政制度に関する彼の考えのかなりの点は、中華民国の袁世凱大総統の顧問になった時点でも維持されていた。

清末の中国には、日本を中央集権の国の代表とし、アメリカを地方分権の国の代表とする考えがあったが⁽¹⁵⁾、このどちらかに中国を当てはめるのではなく、

有賀は第三の形態を考えようとした。こうした有賀の考えがよく反映されているのが、『官制篇』の「地方官制」の部分である。『官制篇』は有賀の論述を漢訳したものであるが、漢訳を担当したのは李景銖・曾彝進の2人である。この2人のうち、李景銖は憲政視察大臣の随員の1人で、中華民国になってからは、袁世凱が設置させ有賀も加わった憲法研究会の一員になった。後者の曾彝進は李景銖と同様に憲法研究会の一員であったが、中華民国約法公布後には汪榮寶や李家駒とともに憲法起草委員会委員になった。

中華民国が成立すると、有賀は1913年に袁世凱の大總統府顧問に招かれた。通訳などを通して彼と密接な関係にあった早稲田大学の青柳篤恒の回想によると、その経緯は次のようなものであった。1913年の春に、当時、中華民国の軍事顧問であった坂西利八郎から早稲田大学の高田早苗に対して、法律顧問就任の打診があった。それは袁世凱の意向を受けたものであったが、高田は当時、学長の要職にあったために、代わりに有賀を推薦した。その結果、有賀が青柳をともなって中国に行き、顧問に就任することになった⁽¹⁶⁾。袁世凱が日本の法学者を顧問として招聘しようとした理由は、中華民国憲法の制定をめぐって国会に対して優位に立つことにあった。

最初の契約では、1913年3月から7月までの5ヶ月間、有賀は顧問として働くはずであった。しかし国会での憲法起草の作業が具体化したために顧問契約は延長され、日本に帰国したのは翌年の7月であった。ただ顧問としての仕事は継続されたようで、日本において中国政府の要請にこたえる約束になっていた⁽¹⁷⁾。中国に赴いた有賀は、袁世凱の指示で設置された憲法研究会に加わり、憲法の要点を提示して参加者に討議させた。その参加者とは、先に言及した李景銖と曾彝進以外に、汪榮寶、陸宗輿、曹汝霖、章宗祥で、大部分が日本留学経験者であった。この6人の中で、汪榮寶、陸宗輿、曹汝霖の3人はいずれも進歩党に属しており、袁世凱政権にとって与党ではあったが、国会の憲法起草委員として活動しながら、同時に大總統府の憲法研究会にも参加していたのである⁽¹⁸⁾。

1913年に国民党議員の多数によって成立した中国最初の国会では、衆参両院から30人の起草委員を選出して憲法の起草に着手した。起草作業はこの年の10月に終了し、11月の初めに憲法会議に提出されたが、これが天壇憲法草案

である。起草委員は国会議員の党派別人数を反映して、国民党所属の議員がもっとも多く、袁世凱に批判的な起草委員が過半数を占めていた⁽¹⁹⁾。この国会主導の憲法案起草に対して、「第二次革命」失敗後の国民党議員の逮捕、各省都督や民政長による国会の解散要求など、直接的・間接的な圧力を袁世凱は加えたが、憲法論の面から起草委員会を牽制したのが憲法研究会である。

有賀は、この憲法研究会のいわば理論的指導者であった。天壇憲法草案の作成が進むと、憲法会議への提出とそこでの議決を阻止するために、袁世凱は顧問官たちに批判の文章を作成させた。有賀も求めに応じて「憲法持久策」を執筆し、天壇憲法草案を批判した。この文章は『憲法新聞』に掲載されたが⁽²⁰⁾、このなかで有賀は、三権分立という共和政体に対する国民の心理に合致しない憲法は長く維持することができないという観点から、天壇憲法草案を批判した。具体的な論点は4点あるが、この憲法草案では国会が行政権を侵害することになると、有賀は指摘している。

「憲法持久策」を執筆した後も、袁世凱の求めに応じて、有賀は天壇憲法草案を批判する意見書をしばしば執筆したが⁽²¹⁾、国会による行政権の侵害という憲法の条文に基づく批判に加えて、そのような条文が存在することの現実の政治への影響として、国内政治の不安定と対外的信用の失墜という問題を指摘した。こうした日本の法学者による批判にもかかわらず、国会の憲法起草委員の方針に変化が生じなかったために、袁世凱は再度、有賀に天壇憲法草案の問題点を列挙させた⁽²²⁾。彼が列挙したのは、すでにふれた点を除けば、軍隊の統帥権の問題であり、軍隊の編制を国会の同意を必要とする法律で定めるとしている条文を批判し、これでは憲法草案が認めている軍隊に対する大総統の統帥権は形骸化されてしまうと指摘している。

こうしてみると、大総統府の法律顧問といいながら、有賀は天壇憲法草案の実現を阻止したい袁世凱政権のために、専門知識を駆使しただけの学者のように思える。しかし政府が議会に対して優位に立ち、政府に対する議会の牽制を極力抑制すべきであるとする彼の考えは、清末の憲政視察大臣への講義のなかですでに提示されていた⁽²³⁾。この点では、有賀の本来の憲政論が袁世凱政権の期待と一致していたわけである。だが有賀の中国憲政論には、やはり憲政視察大臣への講義で提示し、『官制篇』でも詳しく述べ、そして中華民国初期にも維

持されていたもう一つの特色があった。それは中国の立憲政体下での、中央と地方の行政関係に関する彼の主張である。

天壇憲法草案が憲法会議に提出された頃、北京では熊希齡を國務総理とする「一流内閣」が成立した。この熊希齡内閣の施政方針は1913年11月中旬の國務會議で承認され、下旬には北京や上海の新聞で報道された。この施政方針の実際の執筆者は司法部総長に就任した梁啓超だったようであるが、軍民分治制の採用とともに、省制を廃止して地方制度を道と県の二級制とする地方行政改革案が、方針のなかに盛り込まれていた⁽²⁴⁾。こうした省制廃止論は、清朝崩壊直前の憲法草案作成作業が進められていたときに、『国風報』誌上ですでに提起されていた。

1936年の「五五憲草」に至るまで、中華民国の憲法や憲法草案には、地方制度や中央と省との間の権限の画定に関する独自の章が設けられている場合が多い。だが天壇憲法草案はそのような章がないばかりか、中央と地方の関係にほとんど無関心である。熊希齡内閣のような廃省政策、天壇憲法草案のような地方制度への無関心、いずれに対しても有賀は反対の立場に立っていた。中国における立憲政治の樹立にあたって、彼は地方制度を重要な問題の一つとして認識していた。有賀は大總統府の顧問として招聘されることが決まった直後に発表した論文のなかで⁽²⁵⁾、地方行政は中国にとって事実上最も重要な問題であって、少なくとも憲法付属の別法で定めておく必要があることを指摘していた。また顧問として赴任した後に、中国の雑誌に掲載された有賀の言論によれば、憲法の内容において最も困難な問題として大總統選挙規則、大總統権限、地方行政方針の3点をあげていた⁽²⁶⁾。

この有賀の言論を掲載した『憲法新聞』は第17期から24期までの間に、6回にわたって「有賀博士民国憲法全案意見披露」を掲載した。この文章は9章からなる大部なものであるが、最後の第9章のなかで、有賀は憲法のなかに「省制」の章をおき、別に「行省組織法」を制定することを提案し、それぞれの案を提示している。清末から中華民国初期にかけての憲法をめぐる論議のなかで、この有賀の提案は独創的なものであった。彼は中国に対して、清末の『官制篇』と同様に、中央集権制でも地方分権制でもない第3の政治体制を採用することを勧めている。有賀はその理由として、「地方民生の発達」という誕生したばかり

りの中華民国の必要性に加えて、中央と地方の結節点という元代以来の歴史のなかでの省制の役割にも注目していた。

おわりに

清末の憲政準備と日本との関係については、明治憲法と憲法大綱の共通性が指摘され、しばしば清朝による君主権の維持・強化の意図を示すものであるとされてきた。だが大綱主義をとる明治憲法は解釈の幅が広く、単なる条文の比較でこのような判断を下すのは困難である。清朝が派遣した政治視察団や憲政視察大臣、それに日本に留学して帰国した後、憲政準備の実務を担当した人々の改革論は、明治憲法そのものから影響を受けたわけではなく、自国での経験をふまえた日本の政治家や学者の講演、講義、論文などから影響を受けて形成されたのである。

明治の政治家のなかで、中国の立憲改革に最も強い関心を示した人物の1人が大隈重信である。20世紀初頭の日本の文明化達成に強い自信を抱いていた大隈は、清朝が派遣してきた視察団や日本で教育を受ける中国人留学生に対して、明治憲政の模倣を強く勧めた。明治憲政の模倣を勧めるにあたって、大隈が常に強調していたことは中央集権制の実現であった。明治日本の政治史を体験してきた大隈のこの提案は、中国の現実に即して考えた場合、実現は容易なことではなかった。

1902年から7年間の長きにわたって京師大学堂師範館総教習として働き、北京の政治の実態に接近できた服部宇之吉も大隈と同様に、憲政樹立のためには中央集権の実現が必要なことを指摘していた。ただ日本にいて日本憲政の確立に強い自信を抱き、その模倣を求めた大隈とは異なって、北京の中央政界をじかに見ることができた服部には、中央集権制の樹立が、大隈が考えるほどに簡単でないことは、容易に実感できたであろう。

中華民国になって大総統府の法律顧問に招かれた有賀長雄は、中国の立憲政治導入に関して、大隈や服部とは異なった考えを持っていた。その考えは清末の憲政視察大臣に対する講義のなかですでに示されていたのであるが、天壇憲法草案への批判とともにより具体的なものとなっていった。有賀は中国の地方

制度の重要性に留意し、広い国土と膨大な人口を有する中国の統一には、元朝以来の省制の維持が必要であることを認識した。彼は中央と省の権限区分を中華民国憲法のなかで記載し、別に省政府組織法を定めることを提案していたのである。

註

- (1) 稲垣伸太郎「清国の憲政と資政院の開院」(上)『日本及日本人』第543号、1910年。
- (2) 「清官の行政法研究に就て」『東邦協会会報』第150号、1907年。
- (3) 山根幸夫『近代中国のなかの日本人』研文出版、1994年、7～9頁。
- (4) 北鬼三郎「清国の中央集権問題」『外交時報』第154号、1910年。
- (5) 早川鐵治「依然たる満洲政府」『日本及日本人』第560号、1911年。
- (6) 高田早苗「故有賀博士思出の記」『外交時報』第543号、1927年。
- (7) 拙稿「清末の政治・憲政視察団と日本」、曾田三郎編著『近代中国と日本—提携と敵対の半世紀』御茶の水書房、2001年。
- (8) 有賀長雄「清国政体の前途」『外交時報』第105号、1906年。
- (9) 有賀長雄「清国内閣制度改造の機至る」『外交時報』第143号、1909年。
- (10) (8)に同じ。
- (11) 同上。
- (12) 青柳篤恒「清国立憲私議」『外交時報』第126号、1908年。
- (13) 服部宇之吉「清国ノ立憲準備」(其二)『国家学会雑誌』第23巻第7号、1909年。浩洞迂人「清国に於ける立憲政治の価値」『日本及日本人』第507号、1909年。
- (14) 以下の犬養毅等の言論は、張伯烈『假定中国憲法草案』(独叢別墅、宣統元年)による。
- (15) 故宮博物院明清檔案部編『清末籌備立憲檔案史料』中華書局、1979年、上冊、369頁。
- (16) 青柳篤恒「袁世凱顧問としての故有賀博士」『外国時報』第540号、1927年。

- (17) 有賀長雄「北京滞在中の余の事業」『外交時報』第 210 号、1913 年。
同「時局觀察彙報」(一)『外交時報』第 237 号、1914 年。
- (18) 『支那憲法制定事業沿革』(国立国会図書館憲政資料室蔵伊東巳代治関係文書) この書物には執筆者の記載がないが、民国 2 年 3 月に招聘に応じたという記述がある。これはちょうど有賀長雄が顧問に招かれたのと同じ年月であり、内容から判断しても、彼の著作であると考えられる。
- (19) 荊知仁『中国立憲史』聯経出版事業公司、1984 年、251～252 頁。
- (20) 『憲法新聞』第 22 期、1913 年。
- (21) 有賀長雄「評不信任投票制之危険」『憲法新聞』第 23 期、1913 年。
- (22) 有賀長雄「憲法草案之誤点彙誌」『憲法新聞』第 24 期、1913 年。
- (23) 拙稿「清末の政治・憲政視察団と日本」、曾田三郎編著『近代中国と日本－提携と敵対の半世紀』御茶の水書房、2001 年。
- (24) 拙稿「政治的ナショナリズムと地方行政制度の革新」、西村成雄編『現代中国の構造変動』第 3 卷、東京大学出版会、2000 年。
- (25) 有賀長雄「民国憲法開議前の形勢」『外交時報』第 203 号、1913 年。
- (26) 「有賀博士対制定憲法之意見」『憲法新聞』第 16 期、1913 年。

中国における日本人教師、軍事・法律・

政治顧問、産業技術者

氏名	出身地	雇用地	経歴／職	新聞・雑誌等関連記事
相川茂郷	神奈川	北京	度支部財政学堂教習	
相田三代治	山形	成都	中学校教諭／武備学堂教習、成都中学堂教習	
愛田平一郎	鹿児島	長沙	鹿児島県川内中学校教諭／優級師範学堂教習	
相羽恒三		武昌	海軍少佐／海軍学堂教習	
相原庄作	神奈川	長春	吉長鉄路局工務課員、満鉄工務所員	
青木長	東京	武昌	陸軍下士／陸軍小学堂助教、陸軍学堂教習	東亜同文会報告:98号
青木イク	京都	南京	江蘇省立第一医院看護婦	
青木宣純	宮城	北京	陸軍士官学校卒業、北京公使館付武官、陸軍中將、旅順要塞司令／大總統府軍事顧問、日本居留民会副会頭	報知:1908年11月17日 大阪毎日:1908年11月17日 北京档案史料:1998年2期
青木信一	岐阜	四平街	四鄭総工程局事務員、四鄭総工程局事務主任、運輸主任	
青島正智	東京	広東	輜重兵大尉／両広陸軍速成学堂教習	
青柳勝敏		南昌	予備陸軍大尉／都督府参謀処付	
赤木郁雄	岡山	奉天	予備陸軍二等獣医、予備陸軍三等獣医／巡警総督獣医官、奉天省城警務局獣医官、奉天警務局獣医官	
赤倉治吉	石川	奉天	満鉄監工	
永瀬九七	栃木	杭州	全浙鉄路学堂教習	
赤松邦太郎	兵庫	福州	両級師範学堂教習	
秋田友作	北海道	済南	秋田県師範学校教諭／師範学堂教習、山東全省師範学堂教習、山東優級師範学堂教習、山東高等師範学堂教習	
秋野外也	千葉	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習	
秋山昱禧		武昌	原口顧問官通訳	東亜同文会報告:98号
秋山實	福井	広東	工兵曹長／両広陸軍速成学堂教習、広東陸軍講武堂教習	
阿久津成雄	宮城	武昌 奉天	鉄道技師、後備陸軍工兵中尉、元鉄道院技師／湖北鉄道顧問官、京奉鉄道技師、	

			京奉鐵路遼河以東技師長、京奉鐵路技師長	
明田川卓治	新 瀧	福 州	陸軍歩兵中尉／民国体育学校教習、体育学校教習、体育学校・師範学校・工業学校教習	
浅井新太郎	東 京	北 京	陸軍通訳／高等巡警学堂教習	
浅井周治	愛 媛	天 津	松山商業学校教諭／北洋法政専門学堂教習	
朝稻義孝	宮 城	奉 天	学務所翻訳	
浅岡亀次郎	神奈川	長 沙	湖南省立甲種農業学校教習	
浅木 勇	愛 媛	漢 口 洪 江	既濟水電公司電氣技師、湖南省洪江光雄電灯公司技師	
浅田忠順	三 重	南 京	江南実業学堂教習	
浅野金兵衛	宮 城	蘇 州	江蘇兩級師範学堂教習	
浅野 純	神奈川	四平街	四鄭鐵路局技師、四鄭総工程局技師	
浅見正吾	群 馬	保 定	予備騎兵一等卒／北洋陸軍馬医学堂蹄鉄技手	
味岡平吉（平六）	岐 阜	天 津	陸軍一等軍医／北洋軍医学堂教習、陸軍医学堂教習	大阪毎日:1911年4月24日
味岡 謙	愛 知	長 春	岡山市吉備商業学校教師、鉄道院技手／満鉄入社、吉長鐵路局運輸課員、満鉄代表室員	
安達周太郎	島 根	遼 陽	日本赤十字社看護人／遼陽官設医院藥室助手、遼陽州官設医院調剤助手、遼陽県官設医院藥劑員	
足立喜六	静 岡	西 安	山梨県師範学校教諭／高等学堂教習	
足立乙亥千	東 京	福 州	予備陸軍砲兵大尉／関東軍司令部顧問官兼講武学校教官	
姉川繁勝	佐 賀	鄭家屯	岩倉鉄道学校卒業、朝鮮総督府鉄道局雇員、満鉄社員／四洮鐵路局技師	
阿部正治郎	新 瀧	西 安	西安中学堂教習	
阿部精二	岡 山	武 昌	陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	日本:1906年1月1日 東亜同文会報告:98号
阿部好一	山 口	広 安	広安州中学堂教習	
阿部ハツノ	山 口	広 安	広安州實枝女学校教習	
安部四方治	秋 田	荻 港	裕繁鉄鉦公司技手	
天野健蔵	滋 賀	天 津	外務省警部／天津警務学堂教習	大阪毎日:1911年

				4月24日
天野平八	山口	南京	陸軍砲兵少佐／江南講武堂正教習、江南陸軍講武堂正教習	大阪毎日:1908年12月20日
雨森良意	京都	保定	予備三等軍医／陸軍軍官教習、陸軍軍官学堂兼陸軍速成学堂教習及医官	
新井秀一郎	茨城 鹿兒島	広東	中学校教員、岡山県私立関西中学校教員／両広高等工業学校教習	
新井長三郎	群馬	安慶	安慶師範学堂教習	
新井則正	埼玉	杭州	全浙鐵路学堂教習	
荒井徑吉	静岡	長沙	湖南陸軍軍医学校顧問	
新井竹次郎	埼玉	長春	吉長鐵路局現業助手、満鉄站務司事	
有賀長雄	東京	北京	東京帝国大学法科大学講師／大総統府法律顧問	東京朝日:1913年2月17日・27日、3月8日、6月30日、7月10日、8月15日、11月7日・8日 早稲田学報:122号、160号 外交時報:101号、105号、111号、125号、127号、133号、135号、140号、143号、161号、168号、173号、175号
有川貞一	鹿兒島	天津	北洋官報局技手	
有瀬寛	熊本	長春	吉長鐵路局運輸課員	
有田十三	東京	済南	陸軍憲兵大尉、陸軍憲兵少佐／済南警察庁顧問、済南警察庁警務委員、山東省会警務庁委員	
有馬龍彦	東京	三原	工業学校教師、省立工業学校教諭	
有吉大蔵	福岡	四平街	四鄭鐵路局技師、四鄭総工程局技師	
粟屋春太郎	山口	南昌 保定	熊本県立熊本農業学校教師、予備陸軍砲兵少尉／南昌農業学堂教習、保定農業専門学校教習	
安藤虎男	宮崎	保定	陸軍学堂翻訳、陸軍軍官学堂翻訳官	
安藤秋三郎	愛知	福州	北海道中学校教諭／福建高等学堂教習	
安藤吉野	茨城	天津	直隸第一女子師範学校教習	

安藤三郎	栃木	北京	陸軍歩兵大尉／陸軍大学教官	
飯尾駒太郎	岐阜	成都	京都師範学校教諭／高等学堂教習	
飯河道雄	福島	開封	優級師範学堂教習、河南優級師範学堂教習	
飯田一雄	大分	広東	私立早稲田中学校教師／両広優級師範学堂教習	
飯田百枝	宮城	天津	宮城県内郡立水産学校校長兼教諭／直隸水産学校教習、直隸省立甲種水産学校教習	
飯塚貞子	福島	北京	四川女学堂教習	
鑄方徳蔵		武昌	砲兵大佐／軍事顧問幕僚	東亜同文会報告:98号
五十嵐吉三	福島	北京	陸軍歩兵曹長／京師五城学堂教習	東京日日:1908年8月25日
生田清範	熊本	長沙	陸軍歩兵少佐／陸軍速成学堂総教習	
池上馨一	岡山	北京	長崎医学専門学校教授／北京医学専門学校教員	
池田夏苗	東京	蘇州	江蘇兩級師範学堂教習	
池田方正	三重	成都	山口県中学校教諭／優級選科師範学堂教習	
池田太郎	東京	雲南	高等学堂教習	
池田文友	神奈川	南京	陸軍下士／陸軍測繪学堂教習	
池田恒太郎	兵庫	齊齊哈爾	陸軍一等軍医／黒龍江監獄・看守所医師囑託	
池端鉄之助	青森	營口	後備憲兵伍長／巡警総局補習員	
池松常記	熊本	寛橋	馬政局技師／教員	
石井信五郎	群馬	寧波	寧波中学堂・師範学堂教習	
石川宗雄	香川	新民	台湾守備軍通訳、満州軍総司令部付通訳官／新民府公学教習、居留民会会長	
石川喜直	石川	北京	北京医学専門学校教員	
石坂二郎	熊本	広東	雨宮輕便鉄道技師／広東粵漢鐵路公司工程司	
石田 研	宮城	奉天	台湾總督府技師／農業試験場技師	
石田マツ	岡山	南京	旅寧第二女学堂教習	
石田松子	岡山	温州	女子高等師範学校女子職業学校・女子中学校教習	
石塚吉五郎	東京	北京	芸徒学堂教員、農工商部中等工業学堂教習	
石塚豊次郎	千葉	成都 雲南府	四川製革公司經理、雲南陸軍製革廠囑託、雲南府製革廠技師、四川陸軍製革廠經理	

			員	
石塚 匡	千 葉	成 都	四川陸軍製革廠技師	
石塚 保	山 形	嘉 興	桐生高等工業学校嘱託／機械技師	
石堂豊太	東 京	上 海	江南機器局無煙火薬技師	
石野 巍	東 京	南 京	音楽学校講師／両江師範学堂教習	
石橋元一	東 京	武 昌	湖北商業学堂教習	
石橋浅吉	東 京	湖 州	精煉工	
石原省次郎	山 形	長 沙	埼玉県立染織学校助教師／湖南中等工業学校教習	
井下田與吉	千 葉	濟 南	陸軍憲兵曹長／済南警察庁警務副委員、山東省会警察庁副委員	
石山時人	福 島	貴 陽	農林学堂教習	
伊集院競	鹿兒島	広 東	歩兵特務曹長／両広陸軍速成学堂教習	
伊豆丸亮	福 岡	広 東	歩兵曹長／両広陸軍速成学堂教習、広東陸軍講武堂教習	
泉 廉治	東 京	奉 天	東三省法政学堂教習	
泉端瀧衛	千 葉	濟 南	山東農業専門学校教習	
井田茂三郎	福 岡	營 口	福岡県庁職員、大倉組入社、東京工手学校入学、東京建築設計所に入る、東京市役所職員／營口軍政署雇員、營口工程総局副工程司	
井田正忠	茨 城	雲南府	高等警察学校教習	
板垣瑠一	長 野	南 京	江蘇警察庁顧問	
板倉辰五郎	千 葉	奉 天	奉天工芸伝習所教習	
板倉松太郎	東 京	北 京	大審院検事／司法部顧問・同教習所教官	
市川丈太郎	愛 知	成 都	中等工業学堂教習	
市川 懋	埼 玉	鉄 嶺	中央大学卒業／満鉄入社、鉄嶺県署嘱託翻訳委員	
一戸清方	青 森	南 京	両江師範学堂教習	
一丸輝宏	大 分	杭 州	府立大阪医科大学助手兼医員／浙江病院・衛戍病院教官	
市村マツミ	長 野	長 沙	模範小学校教員	
井手勝治	長 野	濟 南	師範学堂講師	
伊藤斌夫	千 葉	杭 州	浙江医薬専門学校教習、浙江医学専門学校教師	
伊藤 壽	福 島	新 民	東京済世学舎医学校卒業、予備三等軍医／新民府衛生局雇	
伊藤幸次郎	奈 良	北 京	芸徒学堂助教員	
伊藤浪三	栃 木	保 定	農商務省技師／北洋陸軍馬医学堂教習、	

		天津	北洋軍医学堂教習、陸軍部所管陸軍獸医学堂教授	
伊藤辰次郎	愛知	南京	陸軍下士／江南講武堂正教習、江南陸軍講武学堂助教	
伊藤允美	新潟	広東	茨城県中学校教諭／両広優級師範学堂教習	東邦協会会報:132号
伊東茂松	山形	太原	岡山第六高等学校教授／山西師範学堂教習	
伊藤邦雄	愛知	南京	両江師範学堂教習	
伊藤栄吉	東京	南京	南洋印刷局技師	
伊東経真	愛知	武昌	陸軍学堂教習	東亜同文会報告:98号
伊藤マツ	山口	福州	福州女子職業学校教習	
伊藤博文	兵庫	大冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司技師	
伊東萬喜平	長野	大冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司技師	
伊藤久泰	岡山	奉天	吉長鉄路局車房長	
伊藤吉太郎	奈良	奉天	吉長鉄路局站司事	
伊藤 威	岩手	奉天	滿鉄計理課員	
糸賀與四郎	茨城	南寧	後備陸軍一等看護長／南寧講武堂教習	
稲葉四郎	東京	北京	騎兵大尉、陸軍騎兵少佐／陸軍大学教官	
稲並幸吉	東京	武昌	第一高等学校教授／両湖師範学堂教習	東亜同文会報告:98号
井上初之助	大阪	奉天	通訳、奉天開埠局交渉員、奉天開埠局差遣委員	
井上 翠	兵庫	北京	京師法政学堂教習	
井上 璞	山形 岩手	広東	歩兵大尉／両広陸軍速成学堂教習、広東陸軍講武堂教習	
井上謙吉	山口	保定	陸軍工兵大尉／陸軍軍官学堂教官	
井上英治	山形	三原府	高等工業学堂染織技師	
井上理吉	福岡	成都	優級師範学堂教習	
井上正吉	東京	四平街	四鄭鉄路局技術員、四鄭総工程局技手	
井上隆根	福岡	長春	吉長鉄路局工程課長	
井上鹿蔵	兵庫	長春	滿鉄監工	
猪子森明	愛知	広東	両広陸軍隨營新軍軍医学堂教習	
井深彦三郎	福島	奉天	衆議院議員、元陸軍通訳官／奉天商務局調査員、奉天勸業道署顧問、交渉局差遣委員・塩運司署兼務	
井深文雄	東京	漢口	揚子器械廠技師、揚子器械廠船舶器械技師	

伊福久恭	岡 山	長 春	吉長鐵路局車房長、滿鉄車房長	
井田正忠	東 京	雲 南	高等警察学校教習	
今井嘉幸	愛 媛	天 津	東京地方裁判所判事、予備陸軍歩兵少尉 ／北洋法政専門学堂教習	
今井政右衛門	長 野	南 京	陸軍下士／江南講武堂正教習	
今井新太郎	茨 城	武 昌	川漢線技手	
今井 締	広 島	奉 天	林務技手／奉天農林学校教習	
今田直策	宮 城	成 都	商礦実業学堂教習	
今野ヤ工	宮 城	成 都	淑行女塾教習	
今福正喜	長 崎	保 定	直隸省立医学専門学校教習	
今村辰三	滋 賀	成 都	官報局技手、官報局教習	
今村孝次	大 分	広 東	富山県中学校教諭／両広高等工業学校教習、 広東高等工業学堂教習	
今村儀一	福 井	濟 南	山東農業専門学校教習	
入口兼太郎	東 京	漢 口	明德大学講師	
岩井尊文	奈 良	北 京	海軍大主計／京師法律学堂教習	
岩井北子	北海道	北 京	陸軍歩兵特務曹長／顧問兼高等巡警学堂 教習	太陽:15 卷 11 号
岩井捷三郎	青 森	内江県	中学堂教習	
岩城基平	宮 崎	雲南府	雲南中等農業学堂教習	
岩切良助	宮 崎	武 昌	川漢線技手	
岩 佐	千 葉	貴 陽	貴陽省立病院看護婦	
岩崎小鹿	三 重	四平街	東洋協会専門学校卒業／滿鉄入社、極東 運輸組合創設、日本電報通信社、滿州国 通信社、滿鉄再入社、四鄭総工程局事務 課員	
岩田清三郎	京 都	遼 陽	山口県防疫事務官／遼陽官設医院医師	
岩田春吉	埼 玉	南 京	江蘇省立第一工業学校教習	
岩田一郎	東 京	北 京	大審院判事／司法部顧問同教習所教官	
岩瀧多麿	千 葉	北 京	千葉県立商工業補習学校教頭／農工商部 中等工業学堂教習	
岩永義晴	長 崎	北 京	陸地測量師／陸軍部測繪学堂翻訳官	東京日日:1908 年 8 月 25 日
岩原大三郎	東 京	貴 陽	武備学堂教習	
岩松義雄	愛 知	北 京	陸軍歩兵大尉／大総統府軍事研究員補佐	
岩本秀彦	宮 城	広 東	工兵大尉／広東陸軍講武堂教習	
巖谷孫蔵	東 京	北 京	京都帝国大学法科大学教授／京師法政学 堂教習、法典編纂会調査員、法制局法典 編纂会調査員、北京大学教授、司法部法	東京日日:1908 年 8 月 25 日 大阪毎日:1909 年

			典編査会編査員、大総統府法律諮議官	1月19日、1911年7月7日 太陽:15卷11号 東亜同文会報告:92号、99号、119号 東洋時報:143号
上島為治	鳥取	成都	高等工業学校教習	
上田芳郎	三重	濟南	師範学堂教習、山東全省師範学堂正教習、優級師範学堂教習	
上田 統	東京	奉天	関東都督府警視、関東庁警視/奉天省警務処顧問、奉天省警察顧問	
上田清吉	兵庫	杭州	光華火柴公司技手	
上田貞蔵	大阪	奉天	吉長鐵路監工	
上野正則	宮崎	營口	第五高等学校卒業/營口軍政署に雇用、商業学堂教習	
上野矢熊	鹿児島	太原	警視庁巡查/山西師範学堂教習	
上野 巽	宮崎	福州	大阪天王寺師範学校教諭/福建高等学堂教習	
上野充一	三重	四平街	湖南長沙日本領事館囑託/満鉄入社、四鄭鐵路局事務員、四鄭総工務局事務員	
植松伊八	佐賀	奉天	奉天外国語専門学校教習	
魚住植一	兵庫	北京	三等主計正/参戦軍訓練所教官	
宇佐美ナヲ	長野 新潟	広東	小学校教員/両広官立女子師範学堂教習、広東女子師範学堂教習	
宇佐美茂野	新潟	広東	小学校教員/両広官立女子師範学堂教習	
氏家謙曹	岩手	北京 開封	第二高等学校教授/京師大学堂師範館教習、河南優級師範学堂教習	大阪毎日:1909年1月21日
白井勝三	長野	武昌	岐阜師範学校教諭/武普通学堂教習、文普通学堂教習	東亜同文会報告:98号
薄井福治	長野	福州	全閩師範学堂教習、福建師範学堂教習	早稲田学報:150号
白田壽恵吉	長野	長沙	東京弘文学院講師/優級師範学堂教習	
内垣実衛	東京	長春	吉長鉄道会計主任、吉長鉄道会計科長	
内田鎮一	福岡	營口 牛莊	陸軍一等軍医、第12師団第3野戦隊付、予備陸軍三等軍医正/衛生総局医官、營埠巡警総局医官、營口警察庁医官、牛莊居留民団行政委員・副議長、營口在郷軍人会会長	

内田金次郎	群 馬	南 寧	後備陸軍一等計手／南寧講武堂教習	
内堀維文	静 岡	濟 南	東京高等師範学校教諭／師範学堂正教習	
宇都宮治右衛門	愛 媛	武 昌	陸軍下士／陸軍小学堂助教、陸軍学堂教習	東 亜 同 文 会 報 告:98 号
馬養八駄助	東 京	天 津	陸軍磨工／北洋学堂付属天津官医院医療磨工	
梅津政徳	千 葉	大 沽	憲兵少佐／北洋憲兵学堂総教習、陸軍警察学堂総教習	
梅謙次郎			新民法編纂事務監督	東京朝日:1908 年 3 月 29 日、3 月 31 日
梅田郁蔵	京 都	広 東	京都医科大学薬局員／両広陸軍随營新軍軍医学堂教習、広東陸軍新軍軍医局医	
梅津 理	宮 城	四平街	満鉄入社、四鄭総工程局事務員、四鄭総工程局事務主任、運輸主任	
梅村次修	福 島	蘭 州	蘭州高等学堂教習	
浦 順平	熊 本	広 東	東京師範学校教諭／両広優級師範学堂教習	
浦崎繁樹	長 崎	長 春	吉長鉄路局工務員、満鉄工務所員	
海野幸世	福 島	芝 罘 濟 南	山東工業専門学校教授	
江口管太郎	大 分	鉄 嶺	予備二等獣医、後備陸軍二等獣医／屠獣所獣医、警務局顧問医、鉄嶺警務公所顧問獣医、鉄嶺警察事務所顧問獣医	
江坂稠三郎	大 阪	成 都	製革公司雇	
榎元半重	北海道	奉 天	教育官練習所講師	
海老名昌一	北海道	湖 州	湖州府中学堂教習	
遠藤保雄	京 都	武 昌	陸軍学堂教習	東 亜 同 文 会 報 告:98 号
遠藤隆太	新 潟	大 冶	製鉄所技師／漢冶萍煤鉄鉍廠公司技師	
大池原誠玄	東 京	成 都	高等師範学堂教習	
大石定吉	静 岡	杭 州 天 津	浙江法政学堂教習、北洋法政専門学堂教習	
大内玄益	東 京	広 東	陸軍一等楽手、陸軍楽長補／両広陸軍速成学堂教習、広東陸軍講武堂教習	
大江與四郎	岐 阜	武 昌	一等軍医／軍医学堂教習	
大川金次郎	熊 本	長 春	吉長鉄路局監工、満鉄監工	
大河平隆則	東 京	杭 州	領事／両浙塩務稽核分所協理	
大木ツナ	福 井	杭 州	緯成株式会社撚糸師範	

大木謙吉	香 川	北 京	新潟県加茂農林学校教諭／農工商部農事試験場技師、農事試験場技師、農商部農事試験場技師、農商部中央農事試験場技師	東京日日:1908年 8月25日
大串忠次	長 崎	海寧州	長安鎮公立中学堂教習	
大窪敬司	宮 城	衡 州	南路師範学堂教習	
大久保宗山	東 京	福 州	福建陸軍医院軍医長	
大越栄蔵		長 春	吉長鉄道技師	
大島道太郎	東 京	漢 口	東京帝国大学工科大学教授／漢冶萍煤鉄鋳廠公司顧問	
大島弘公	熊 本	成 都	通省師範学堂教習	
大島政治郎	長 崎	四平街	四鄭鐵路局事務員、四鄭総工程局技師	
大島重治郎	三 重	長 春	吉長鐵路局会計課員、滿鉄材料課員、滿鉄計理課員	
大杉ハル		武 昌		
太田一平	兵 庫	保 定	直隸法政学堂教習	
太田資事	茨 城	南 寧 西 安	予備歩兵特務曹長、予備陸軍准士官／南寧講武学堂教習、西北大学教習	
太田喜智	千 葉	巴 県	巴県女子師範学堂教習	
大谷 憲	鹿兒島	奉 天	東三省法政学堂教習	
大多和保太郎	東 京	南 寧 蘇 州	予備歩兵曹長／南寧講武堂教習、陸軍学堂教習	
大津源三郎	山 形	天 津	北洋師範学堂教習	
大塚周太郎	埼 玉	天 津	陸軍憲兵曹長／北洋師範学堂教習	
大塚藤三郎	福 岡	大 冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司技師、漢冶萍煤鉄鋳廠公司築炉部員	
大坪恭三	静 岡	天 津	陸軍一等主計／陸軍經理学堂教習	
大鳥居辨三	滋 賀	成 都	高等学堂教習	
大西勝人	山 口	湖 州	湖州府中学堂教習	
大野 瑛	熊 本	成 都	東洋予備学堂教習	
大野喜代	福 島	成 都	淑行女塾教習	
大野佐吉	佐 賀	大 冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司築炉部員	
大場 昂	新 潟	濟 南	優級師範学堂教習、山東優級師範学堂教習	
大橋政次	滋 賀	南 京	江南実業学堂教習	
大橋定助	東 京	長 沙	湖南公立中等工業学校教習、湖南中等工業学校教習、湖南省立甲種工業学校	
大丸谷理吉	京 都	醴 陵	醴陵磁業学堂・醴陵磁業公司模範職工	
大村彦作	静 岡	天 津	陸軍工兵特務曹長／北洋陸軍電信学隊専	

		保定	科教習、陸軍電信学隊教習	
大村卓一	福井	北京	鉄道省技師／交通部技術委員会顧問	
大森弘資	愛媛	營口	東京工手学校卒業、吉田組入社、稲田組 (朝鮮) 土木建築部主任／營口軍政署雇 員、營口工程総局絵図師	
大森千蔵	福岡	太原	山西優級師範学堂教習	東亜同文会報 告:43号
大森四郎	新潟	福州	農学校教習、福建省立甲種農業学校教習	
大矢露子	東京	奉天	第一蒙養院助教	
大八木甚蔵	東京	貴陽	文通書局技手	
大脇菊次郎	鹿児島	広東	警視庁属兼警部／広東警察学堂教習、広 東高等警察学堂教習	
岡 栄太郎	青森	天津	東京第一中学校教諭／北洋師範学堂教習	
岡口竹次	熊本	四平街	四鄭総工程局線路建設補助員	
岡崎平三郎	群馬	九江	江西鉄道技師	
岡島 誘	熊本	蘭州	蘭州高等学堂教習	
岡田朝太郎	東京	北京	東京帝国大学法科大学教授／修律調査 員・法政教習、京師法律学堂教習、欽命 修訂法律館調査員、北京法政専門学校教 習兼法制局法典編纂会調査員	都新聞:1906年 11月1日 東京日日:1907年 12月25日、1908 年8月25日 報知:1909年1月 24日、1910年7 月11日・27日 大阪毎日:1910年 7月11日、1911 年1月21日 東京朝日:1910年 5月19日、1911 年1月24日 早稲田学報:140 号 太陽:15巻10 号・11号 東亜同文会報 告:80号、83号、 92号
岡田ウノ	京都	北京	慧仙女学堂教習	
岡田定次郎	広島	太原	京都大学講師／山西大学堂教習	

岡田喜太郎	京都	三原府	高等工業学堂織物工師	
岡田光造	岡山	江北	江北何鹿蒿瑠璃廠技手	
岡田寧次	東京	北京	歩兵大尉／大總統府軍事研究員補	
岡本直吉	福岡	營口	予備憲兵上等兵／巡警總局補習員	
岡本常太郎	和歌山	宣順	自流井私立樹人学堂教習	
岡本茂義	高知	奉天	駅助役／吉長鐵路副站長	
小川寛之助	東京	奉天	南滿州鐵道株式会社技手／鐵路副工程師、京奉鐵道技師	
小川庄蔵	宮崎	康平県	後備歩兵曹長／蒙古博王府立学校教師	
小川勝猪	高知	天津	外務省巡查／天津警務学堂教習	
小川邦人	広島	南京	両江師範学堂教習	
小川市太郎	秋田	南京	両江師範学堂教習	
小河滋次郎	長野	北京	司法省監獄事務官／京師法律学堂教習、欽命修訂法律館調査員	東京日日:1908年 8月25日 報知:1910年7月 27日 太陽:15卷11号
小川正	福井	成都	通省師範学堂教習	
荻野亨	岡山	四平街	熊本高等工業学校卒業／満鉄入社、四鄭鐵路局に派遣され民国交通部工務司、四鄭總工程局技師	
奥野藤一	京都	杭州	虎林株式会社織物紋様師	
奥宮建之		干崖	干崖宣撫使招聘	
小椋科三	長野	広東	大蔵省専売局技手／広東私立実務農業学校教習	
小倉孝治	東京	安慶	安慶師範学堂教習	
小栗盛三郎	岐阜	四平街	鐵道院技手／四鄭鐵路局技師、四鄭總工程局技師、保線課課長	
小黒忠次郎	新潟	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習	
小澤積吉郎	鹿児島	長春		
御厨健次郎	長崎	広東	予備砲兵中尉／両広陸軍測繪学堂教習	
小田團次郎	福岡	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司技師、漢冶萍煤鉄鉍廠公司機械部員	
小田原寅吉	宮崎	營口	上海東亜同文書院卒業、陸軍通訳／商業学堂教習、満鉄入社運輸課勤務	
落合兼松	鹿児島	成都	東京府中学校教諭／優級選科師範学堂教習、優級師範学堂教習	
落合兼光	宮崎	貴陽	中学堂教習	

落合半之丞	宮崎	貴陽	貴陽中学堂教習	
落合鍋三	新潟	長春	吉長鐵路局會計課員、滿鉄材料課員	
小野敏夫	福岡	太原	山西農林学堂教習	
小野孝太郎	静岡	蘇州 北京	江蘇兩級師範学堂教習、北京大学農科大学教授	
小野清一	東京	蘇州	江蘇兩級師範学堂教習	
小野八千代	長野	南京	旅寧第一女学堂教習	
小野田義介	鹿児島	荻港	裕繁鉄鉱公司技師長	
小野寺勇吉	東京	長春	吉長鐵路局運輸課員、滿鉄工廠員	
小之原作一	鹿児島	武昌	武昌電燈公司技師	
小幡勇治	岐阜	天津	浜松中学校教諭／直隸提学務公所教習、直隸提学使教習、直隸第一師範学堂教習	
小畑勇吉	福井	福州	福建師範学堂教習	
尾見五郎	兵庫	奉天	大阪高等医学校教諭／奉天中学堂正教習	
小山田謙	東京	保定	一等軍医／直隸總督府衛生隊教習	
小山田淑助		武昌	陸軍小学堂教習	日本:1906年1月1日 東亜同文会報告:98号
折原佐十郎	群馬	武昌	鐵路学堂教習	
甲斐一之	熊本	保定	司法省参事官／直隸法政学堂教習	
戒田秀澄	愛媛	四平街	四鄭鐵路局會計主任、四鄭總工程局會計主任兼課長	
開発円蔵	新潟	長春	吉長鐵路局報生	
嘉悦敏	熊本	天津	騎兵中佐／北洋軍事顧問、北洋陸軍講武堂總教習	
柿田健吉	大阪	宣化	宣化府初級師範学堂教習	
柿沼巖	東京	奉天	滿鉄機務係員	
角田啓司	北海道	奉天	福岡県技師／農業試験場技師	
籠田定憲	青森	四平街	滿鉄入社、四鄭鐵路局技師、四鄭總工程局技師	
河濟友吉	山口	營口	関東都督府警部兼外務省警部／營埠巡警總局正工程司、營埠巡警總局警務教習	
笠井善三郎	徳島	長春	吉林農業学堂教習	
柏田哲男	鹿児島	奉天	東三省法政学堂教習	
柏原伊之吉	福島	保定	和歌山県師範学校教諭／直隸師範学堂教習、直隸優級師範学堂教習	
梶原熊雄	福岡	蘇州 南京	江蘇兩級師範学堂教習、江南高等学堂教習	

糟谷陽二	東京	漢口	既濟水電公司技術顧問	
加知貞一郎	岐阜	吉林 長春	吉林農工商局実業学堂教習、実業学堂教習、農業学堂教習	
勝木恒喜	熊本	武昌	陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	東亜同文会報告:98号
勝田萬吉	大阪	成都	製革廠技手	
勝本彌市	東京	長沙	洞庭製革株式会社技手	
桂徳治	鹿児島	康平県	予備工兵曹長／蒙古博王府立学校教師	
加藤貞	東京	北京	東京市尋常高等小学校訓導／京師第一蒙養院教習	
加藤子郎	静岡	天津	日本銀行書記／天津銀号事務教習、天津銀号銀行専習所教習	
加藤勇造	静岡	長春	吉林製紙会社技師長	
加藤政司郎	千葉	成都	優級師範学堂教習	
加藤長太郎	東京	北京	海軍大尉、海軍少佐／測量学校水路班教員、北京測量学校水路班教習	
加藤政蔵	京都	杭州	緯成株式会社紋様師	
加藤芳太	福井	杭州	緯成株式会社撚糸師範	
加藤謙一	千葉	芝罘	後備陸軍歩兵少尉／塩務稽核洋助理員	
加藤赫二	東京	長春	満鉄会計主任、満鉄代表兼会計主任	
加藤宗太郎	東京	長春	満鉄監工	
金ヶ谷伝次	佐賀	福州	磁業公司技師	
金子彦太郎	福岡	長春	吉長鐵路局副站長	
兼田弥吉	京都	營口	後備憲兵軍曹／巡警総局補習員	
樺島礼吉	福岡	南京	江南実業学堂教習	
鎌田清彦	鹿児島	長春	吉長鐵路局養路課長	
神代精二	福岡	大冶	製鉄所技師／漢冶萍煤鉄鉍廠公司技師、漢冶萍煤鉄鉍廠公司土木部員	
亀井甲子蔵	宮城	天津	歩兵少佐／北洋陸軍講武堂教習	
亀田操子	大阪	北京	豫教女学堂教習	
河合絹吉	愛知	雲南	高等学堂教習	
川上精一	東京	濟南	農林学堂教習、山東高等農林学堂教習	東亜同文会報告:83号
川喜多大治郎	東京	保定	歩兵大尉／陸軍軍官教習	
川北梅太郎	香川	江北	江北何鹿蔘瑠璃廠技手	
川崎武親	福岡	成都	優級師範学堂教習	
川島浪速	東京	北京	顧問兼高等巡警学堂監督、	東京日日:1905年7月31日、1908年8月25日

				報知:1910年12月27日 大阪毎日:1906年5月3日 東亜同文会報告:27号、31号、57号、77号、92号、99号、125号
川島 民	千葉	杭州	工業学堂教習	
河瀬半四郎	徳島	済南	師範学堂教習、山東全省師範学堂教習	
河瀬真澄	熊本	大冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司築炉部員、漢冶萍煤鉄鋳廠公司機械部員	
川添亀之進	宮崎	済南	広島県立西条農学校長/山東農業専門学校教習	
河田貫三	京都	北京	大蔵省稅務監督局長/財政部稅務調査委員	
川田栄吉	熊本	長春	吉長鉄路局工務課員、満鉄工務所員	
川端 重	福井	杭州	緯成株式会社織物模様師	
河原小太松	京都	醴陵	醴陵磁業学堂・醴陵磁業公司模範職工	
河原勘太郎	佐賀	雲南府	東京帝国大学農科大学助教授/農業学校教習兼農事試験場技師	
川淵薫平	岡山	北京	岡山県立工業学校教諭/芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習	
河村静雄	山口	四平街	四鄭鉄路局技師	
河村文三郎	宮城	奉天 長春	鉄道作業局教習所卒業/奉天駅助役、吉長鉄道技師補、吉長鉄道工務科員、庶務課課長	
河村精一	秋田	済南	山東農業専門学校教習	
川村啓吉	千葉	汕頭	嶺東同文学堂教習	
川村善六郎	宮城	福州	後備陸軍一等軍医/福州督軍公署囑託医員	
川面誠之助	鳥取	四平街	四鄭鉄路局事務員、四鄭総工程局事務員	
川本乙松	石川	醴陵	醴陵磁業学堂・醴陵磁業公司模範職工	
菅 正雄	岡山	杭州	工業学校図案工	
菊池正助	岩手	遼陽	陸軍二等獣医/屠獣場獣医	
菊池武夫	宮崎	奉天	陸軍歩兵中佐、陸軍歩兵大佐/奉天將軍府軍事顧問、奉天督軍顧問、奉天督軍軍事顧問	

菊池武保	熊 本	奉 天	農場試験場技手	
菊地 勉	福 井	広 東	福井師範学校訓導／両広方言学校教習	
木暮藤一郎	群 馬	長 沙	湖南中等農業学校教習	
貴志彌次郎	群 馬 和歌山	奉 天	陸軍歩兵少佐／東三省講武学堂教習	
岸本広吉	東 京	北 京	総稅務司署稅務司	
北尾 鼎	愛 知	天 津	北洋師範学堂教習	
北岡善治	東 京	大 冶 武 昌	湖北省立工業学校教習	
北岡啓太郎	東 京	長 春	吉長鐵路局運輸課員	
北田正寅	東 京	武 昌	湖北商業学堂教習	
北爪宣隆	兵 庫	四平街	運輸課員、機務段長	
北堀 誠	静 岡	長 春	滿鉄教習所卒業、滿鉄副站長、滿鉄營業課員	
北村澤吉	高 知	北 京	京師第一師範学堂教習	
北村信吉	岩 手	南 昌	高等農林学堂教員	
北村啓太郎	徳 島	長 春	後備陸軍三等主計／滿鉄代表室員	
木下米市	佐 賀	保 定	東京農科大学助手／高等農業学堂副教習	
木原金一	岡 山	保 定	鹿兒島高等農林学校助教授／高等農業学堂教習	
木原秀三	福 岡	成 都	実業司模範製糸工場技師	
木村卯三郎	福 岡	奉 天	農場学堂教習	
木村恒夫	熊 本	武 昌	歩兵大尉／陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	東亜同文会報告:98号
木村鏑太郎		武 昌	鉄道技師／湖北鉄道顧問官	東亜同文会報告:98号
木村欽一	佐 賀	吉 林	吉林法政館教習	
木村正平	埼 玉	成 都	高等工業学校職業教授、甲種工業学校職業教授	
木村敏夫	宮 城	四平街	四鄭鐵路局事務員、四鄭総工程局事務員	
京谷久蔵	秋 田	彭 県	銅鉞局技手	
清川仙松	京 都	北 京	農工商部中等工業学堂教習	
清宮宗親	茨 城	貴 陽	武備学堂教習	
切田太郎	岩 手	北 京	東京高等商業学校教授／京師大学堂教習	
草地 喬	岡 山	大 冶	漢冶萍煤鉄鉞廠公司土木部員	
葛上徳五郎	奈 良	天 津	陸軍歩兵曹長／天津警務学堂教習	
楠 基道	岐 阜	濟 南	優級師範学校教習、山東優級師範学堂教習	
楠 藤三郎	東 京	長 沙	洞庭製革株式会社技手	

楠原正蔵			直隸省農政顧問	大阪毎日:1904年 9月1日 東亜同文会報 告:52号、69号
杳谷栄輔	山口	天津	歩兵少佐/総督府督練所翻訳官	
工藤貞之助	大分	長春	満鉄材料課員	
久納 汪	愛知	広東	歩兵曹長/両広陸軍速成学堂教習	
久保田運統	長野	衡州	衡州府中学堂教習	
久保田正継	京都	長沙 北京	統監府鉄道庁技師/湖南高等実業学堂、 内務部土木技師	
久保田峰治	長野	奉天	満鉄監工	
熊谷直道	宮城	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司技師	
熊澤文吾	岐阜	天津	岐阜県師範学校訓導/直隸学務所教習、 直隸提学使教習	
組岡儀蔵	京都	長春	満鉄工廠監工、	
九門雄二	愛媛	四平街	鉄道院技師/四鄭鉄路局技師長工務課 長、総工程司兼処長	
倉谷箕蔵	東京	芝罘	毓材学堂教習	
栗野宗太郎	石川	南京	両江師範学堂教習	
栗屋貫一	山口	成都	陸軍歩兵大尉/武備学堂教習、陸軍速成 学堂教習	
来海篤次郎	島根	北京	佐賀県有田工業学校教諭/農工商部中等 工業学堂教習	
黒石章介	山口	四平街	工務課員、材料課員	
黒川敬蔵	熊本	保定	騎兵大尉/北洋陸軍武備学堂教習	
黒木八五郎	鹿兒島	長春	攻玉社工学校卒業、鉄道院鹿兒島建設事 務所勤務、南薩鉄道技手/慶尚南道土木 部、満鉄工務員	
黒河内科男	長野	長春	吉長鉄道会計兼翻訳員	
黒田正憲	福岡	成都	中等工業学堂教習	
桑野久任	東京	北京	東京帝国大学助教授/京師大学堂師範館 教習	
桑原信雄	京都	天津	北洋法政専門学堂教習	
桑村伸三	大阪	成都	甲種工業学校教習、同仁教養工廠技師	
郡司 厚	茨城	保定	陸軍学堂教習	
小泉上之丞	岡山	芝罘	塩務署長	東邦協会会 報:132号
志々目栄蔵	長崎	開封	開封電燈公司技師	
向後順一郎	東京	福州	全閩師範学堂教習、福建師範学堂教習、	早稲田学報:150

		開 封	河南高等師範学堂教習	号 東亜同文会報 告:49号
河野春庵	東 京	武 昌	後備騎兵大佐／軍官学堂教習	
河野巖男	宮 崎	營 口 牛 莊	大蔵省専売局参事／奉天塩務稽核分所協 理	
河野六郎	大 分	太 原	宮城県立農学校教諭／農業専門学校教習	
河野 哲	宮 城	長 春	吉長鐵路局運轉課員、滿鉄運輸課員	
江部淳夫	新 潟	雲 南	高等学堂教習	
古賀 建	福 岡	長 春	吉長鐵路局工務員、滿鉄工程司	
小金龜次郎	東 京	太 原	山西大学堂教習	
小鹿佛海	愛 知	天 津	北洋法政専門学堂教習	
小島 学	群 馬	北 京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教 師	
小島繁三	広 島	長 春	吉長鐵路局電路手	
古城梅溪	大 分	天 津	北洋医官兼北洋防疫医院長	
古城良知	大 分	南 昌	旅順工科学堂卒業／南昌電燈公司技師	
小平 一	長 野	奉 天	滿鉄鐵道教習所卒業、運轉課課長、奉天 鐵道事務所配車係主任、哈爾濱鐵路弁事 処庶務課課長、北支事務局經理部審査課	
小谷鉄次郎	鳥 取	北 京	農商務省特許局審査官／高等実業学堂教 習	
児玉盛長	大 分	成 都	軍医学堂教習	
後藤龍緑	兵 庫	天 津	北洋師範学堂教習	早稲田学報 167 号、181号
後藤美之	栃 木	眉 州	中学堂教習、眉州中学堂教習	
後藤房治	北海道	武 昌	農務学堂教習	
小西織之助	大 阪	成 都	四川製革公司技師	
小西三七	東 京	成 都	中央气象台囑託／中央師範学堂教習、通 省師範学堂教習	
小林多吉	東 京	安 東	警視庁巡查部長／警察教習	
小林吉人	熊 本	北 京	京師法政学堂教習	太陽:15卷 11号
小林敬吉	宮 城	杭 州	私立鐵路業務学堂教習	
小林彌太郎	京 都	長 沙	湖南省立甲種工業学校教習	
駒井於菟	石 川	天 津	天津工芸学堂教習	
小松傑三郎	長 野	広 東	鐵道庁技師／広東粵漢鐵路公司工程司	
小松彌市	大 分	奉 天	陸軍一等獣医／奉天警察庁獣医官	
小松崎武司	茨 城	太 原	山西師範学堂教習	
五味政吉	長 野	巴 県	蜀眉絲廠技手	

小宮 成	佐 賀	北 京	蒙古阿親王府鋳業技師	
小宮隆三	熊 本	武 昌	鉄道技師／湖北鉄道顧問、粵漢線技師	
小山十一郎	鹿兒島	長 沙	岐阜県技師／湖南高等実業学堂	
是枝真一	鹿兒島	長 春	吉長鐵路局会計課員、満鉄計理課員、満鉄代表室員	
是永重雄	福 岡	北 京	陸軍騎兵大尉／陸軍大学校教官	
是安正利	北海道	長 春	満鉄入社、吉長鐵路局工務員、満鉄工務員、鉄道部運輸課技術研究所兼鉄道部運輸課理學試験所、中央試験所奉天事務所、新京事務所等勤務、調査部調査役、満鉄工廠長	
近藤義策	富 山	保 定	輜重兵大尉／陸軍速成学堂教習	
近藤出来治	高 知	保 定	和歌山県師範学校教諭／直隸師範学堂教習、直隸優級師範学堂教授	
近藤時太郎	長 崎	武 昌	農務学堂教習	
近藤博夫	兵 庫	大 冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司土木部員	
近藤金房	東 京	北 京	工兵少佐／參戰軍訓練所教官	
近藤正吉	宮 城	長 春	吉長鐵路局監工、満鉄工廠監工	
斉藤 恒	石 川	吉 林	陸軍歩兵大佐／督軍署顧問	
斉藤傳壽	熊 本	天 津	北洋大学堂教習、北洋師範学堂教習	
斉藤チカ	和歌山	南 京	旅寧第一女学堂教習	
斉藤イシ	福 島	長 沙	模範小学校教員	
斉藤豊喜	熊 本	南 昌	実業学堂教習、農林学堂教習	
斉藤 稔	岡 山	齊々哈爾	陸軍砲兵中佐／督軍府軍事顧問	
斉藤豊美	岩 手	杭 州	緯成株式会社製糸師	
斉藤 定	大 分	長 春	満鉄副站長	
佐伯 新	兵 庫	奉 天	総検課課長	
酒井親輔	山 形	保 定	農商務省農事試験場技手／高等農業学堂教習、直隸中等農業学堂教習	
酒井春蔵	愛 知	成 都	陸軍歩兵中佐／武備学堂教習	
酒井ヨノ	福 島	安 慶	藩署幼稚園教習	
酒井三郎	熊 本	重 慶	蜀軍司令部軍医処助手	
嵯峨崎開成	岐 阜	嘉 興	桐郷県学堂教習	
坂田虎之助	和歌山	南 京	陸軍歩兵少佐／江南講武堂正教習	大阪毎日:1908年 12月20日
坂田植松	静 岡	鄭家屯	四洮鐵路局工夫	
坂本友巳治	東 京	福 州	福州電気公司技師	
坂本健一	兵 庫	北 京	京師大学堂師範館教習	大阪毎日:1909年

				1月21日
坂本俊馬	奈良	鄭家屯	憲兵中尉、憲兵大尉／遼源警察顧問	
阪本菊吉	山梨	北京	農商務省実業練習生／農工商部工芸局教習	東京日日:1908年 8月25日
佐久義雄	東京	天津	北洋官報局技手	
作田莊一	山口	武昌	湖北法政学堂教習	
佐久間三郎	千葉	長沙	予備三等軍医／陸軍速成学堂總教習、陸軍小学堂教習	東亜同文会報告:62号
佐倉孫三	福島	福州	山梨県郡長／福州警務学堂教習	
櫻井文雄	愛媛	保定	陸軍歩兵少佐／陸軍軍官教習、陸軍軍官学堂總教習	
桜井音五郎	群馬	北京	農工商部中等工業学堂技手	
桜庭行蔵	福岡	瀘州	岡山師範学校教諭／師範学堂教習	
迫田栄太郎	鹿児島	雲南	東文学堂教習、高等学堂教習	
笹尾宇作	山口	広東	鉄道庁技師、鉄道院技師／粵漢鐵路公司工程司、広東粵漢鐵路公司工程司	大阪毎日:1910年 6月25日
佐々川豊吉	東京	成都	中等工業学堂教習	
佐々木謙吉	岐阜	武昌	川漢線技手	
佐々木貫練	神奈川	武昌	粵漢線技手	
佐々木恵三	北海道	福州	福建陸軍医院薬剤官	
佐々木彦太郎	宮城	漢口	既済水電公司電気技師	
左志駿次郎	長崎	奉天	満鉄入社、大連病院勤務、関東庁嘱託、北京交通部直轄四洮鉄道局嘱託、医師	
佐竹透	東京	天津	天津女子師範学校教諭	
佐藤敏久	岡山	四平街	四鄭鐵路局技師、四鄭総工程局技師	
佐藤達三	宮城	四平街 長春	四鄭鐵路局事務員、吉長鐵路局会計課長、満鉄材料課長	
佐藤昌一	東京	營口	大阪商業学校卒業、大阪鉄道会社、紀和鉄道会社、逓信省電信灯台用品製造所、東京市街鉄道会社等に勤務／營口軍政署雇員、營口工程総局絵図師	
佐藤進三	東京	三原県	弘道高等学堂教習	
佐藤操子	東京	長沙	小学校訓導／蒙養院教員	
佐藤廉造	山形	広東	群馬県師範学校教諭／両広優級師範学堂教習	
佐藤佐吉	山梨	奉天	山林技師／奉天工芸伝習所技手、奉天農林学校教習	
佐藤九十九	宮城	長春	鉄道院技師／吉長鉄道技師、長春鉄道技師、吉長鐵路副工程司、満鉄工務工程司	

佐藤栄治郎	宮崎	武昌	陸軍下士／陸軍学堂教習	
佐藤操	東京	武昌	湖北模範小学堂教習	
佐藤知恭	新潟	武昌	鐵路学堂教習	東亜同文会報告:98号
佐藤真	宮城	杭州	工業学校教習	
佐藤正明	鳥取	長春	吉長鐵路局副站長	
佐藤峰雄	大分	奉天	吉長鐵路工務所員	
佐土原勘次郎	鹿兒島	新民	新民府衛生局雇通訳	
鮫島茂	鹿兒島	濟南	山東高等農林学堂教習	
澤圭二	新潟	四平街	四鄭鐵路局事務員、四鄭総工程局事務員	
澤井由松	神奈川	四平街	四鄭総工程局技術員	
澤村大字	熊本	濟南	山東全省師範学堂教習	
澤山栄造	滋賀	四平街	四鄭総工程局事務員、四鄭総工程局事務主任、運輸主任	
私市一太郎	東京	長春	滿鉄副站長	
塩谷利清	新潟	長春	私立鉄道学校卒業／滿鉄入社、吉長鐵路局営業課長、滿鉄運輸部貨物係主任、哈爾濱事務所運輸課長	
塩見競	岡山	南京	両江師範学堂教習	
塩路幾之丞	東京	福州	福建工芸伝習所技師	
志賀実	宮城	南京	両江師範学堂教習	
志賀潔	東京	成都	優級師範学堂教習、四川高等学校教習	
志熊貞治	山口	奉天	予備陸軍一等軍医／巡警総督医官	
志々目栄作	鹿兒島	宜昌	宜昌光明電燈公司技師	
志田鉦太郎	千葉	北京	東京高等商業学校教授、東京法科大学教授／京師法律学堂教習、欽命修訂法律館調査員	報知:1910年7月3日、7月27日 太陽:15巻10号・11号
篠崎正	茨城	武昌	湖北法政学堂教習	
篠原保熊	島根	保定	一等看護長／北洋陸軍馬医学堂教習	
柴田勝熊	熊本	天津	北洋師範学堂教習	
芝原久三郎	京都	杭州	工業学校機械科実習教範、緯成株式会社織物師	
芝本為一良	和歌山	北京	大学堂・第一師範学堂教習	
芝元正次郎	鹿兒島	長春	滿鉄入社、大連滿鉄従事員養成所車輛科卒業、吉長鐵路局運転課員、滿鉄運輸所員	
柴山武之助	和歌山	武昌	粵漢線技手	
島崎伝治	埼玉	營口	東京工手学校卒業／營口軍政署雇員／營	

			口工程総局副工程司	
島田傳之助	徳島	杭州	杭州医学校	
島田悦太	愛媛	奉天	工務司	
志水直彦	京都	武昌	鐵路学堂教習	東亜同文会報告:98号
清水賢雄	岐阜	長春	京都帝国大学卒業／満鉄入社、満鉄工務主任、大連鉄道事務所長代理、奉天鉄道事務所長、大連鉄道事務所次長、大連鉄道事務所長、鉄道部工務課長、鉄道部次長	
下村孝光	東京	天津	東京印刷局技手／北洋官報局技長、北洋官報総局技師長	
謝花寛功	沖縄	三原県	御影師範学校教諭／弘道高等学堂教習	
庄司勇次郎	宮城	奉天	庶務課司事	
城所濱吉	福島	四平街	四鄭鐵路局技術員	
白井太四郎		成都	陸軍歩兵大尉／武備学堂教習	
白井音次郎	奈良	北京	伝染病研究所技術員	
白川勇喜	福島 福岡	広東	鉄道庁技手／粵漢鐵路公司助手	
新庄瀨人	東京	營口	憲兵曹長／巡警総局補習員	
真藤駿士	福岡	武昌	陸軍下士／陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	大阪毎日:1906年 5月15日 東亜同文会報告:98号
新納時義	鹿児島	南京	鹿児島県警部／南京巡警学堂教習	
進來重松	大分	成都	熊本県中学校教諭／高等学堂教習	
末松政樹	福岡	奉天	東三省法政学堂正教習	
菅正雄	岡山	杭州	工業学校凶案工	
菅沼重照	長崎	武昌	川漢線技手	
菅野新一郎	宮城	常德	佐渡中学校教諭／西路師範学堂教習	
菅場惣明	宮城	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司技師	
菅谷貫	千葉	済南	青島守備軍民政部囑託／山東省長公署諮議、山東省会市政庁諮議	
菅原清	岩手	武昌	粵漢書記	
菅原松治	宮城	彭県	銅鉍局技手	
杉栄三郎	岡山	北京	検査官補／京師法政学堂副教習	報知:1911年7月 7日 大阪毎日:1911年 7月7日

				太陽:15卷11号 東亜同文会報 告:92号
杉寛一郎	愛媛	武昌	軍医学堂教習	東亜同文会報 告:98号
杉田稔	大阪	南京	東京高等工業学校助教授/両江師範学堂 教習	
杉野章	愛知	北京	京師大学堂付属博物実習	
杉本浩三	神奈川	奉天	予備陸軍三等軍医/巡警總督医官	
杉本憲作	栃木	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂 教習	
杉本兵七	京都	醴陵	醴陵磁業学堂・醴陵磁業公司助手	
杉本正直	東京	成都	成都武備学堂教習、優級師範学堂教習	
鈴木留吉	兵庫	九江	南潯鐵路公司工夫長、南潯鐵路公司技手	
鈴木直三郎	三重	西安	高等学堂教習	
鈴木萬太郎	東京	南京	実業学堂付属植木技手、両江總督雇植木 職	
鈴木珪壽	福島	杭州	浙江高等学堂教習、兩級師範学堂兼勤	
鈴木松太郎	大阪	雲南府	雲南府陸軍製革廠技師、雲南府製革廠技 手	
鈴木重孝	兵庫	北京 天津	東京郵便電信学校卒業、通信技師/北京 電話總局技師、天津電話局監督技師兼駐 津電料分処副總官、北京電話總局工程司	北京档案史 料:1998年2期
鈴木鍬三郎	愛知	澄海	織物技師	
鈴木俊治	新潟	杭州	浙江医業專門学校教習、浙江医学專門学 校教師	
鈴木宅次郎	静岡	鄭家屯	満鉄所屬人/四洮鐵路局工夫	
鈴木重一	東京	長春	満鉄運輸所員	
鈴木專吉	宮城	奉天	庶務課課員	
鈴木美通	山形	吉林	陸軍士官学校卒業、陸軍大学校卒業、関 東軍司令部付、陸軍歩兵中佐/吉林督軍 署顧問	
須藤一多	群馬	成都	中学校教諭/客籍学堂教習、通省師範学 堂教習	
須藤理助	栃木	南寧 南京	予備陸軍二等軍医/南寧講武学堂教習、 江蘇督軍署囑託医	
諏訪敏人	徳山	広東	神戸税関監吏/広東方言学堂教習	
関武熊	鹿児島	安東	外務省巡查/巡警局助教習	
関口壮吉	静岡	長沙	高等学堂教習	日本:1904年4月

				22日 東亜同文会報 告:54号
関口彌作	秋田	奉天	奉天師範学堂教習、奉天兩級師範学校教習	
関根金作	群馬	南京	陸軍下士／江南講武堂正教習、江南陸軍講武堂助教	
関本幸太郎	和歌山	保定	東京高等師範学校教諭／直隸師範学堂教習、直隸優級師範学堂教授	
関山 富	神奈川	広東	司法官試補／兩広法政学堂教習	
瀬藤義三	福岡	成都	製革公司雇	
千住頼一	佐賀	成都	高等工業学校教習、四川公立工業専門学校教習	
蘇火土	台湾	南京	省立医院囑託医師	
相馬磯松	秋田	彭県	銅鋳局技手	
副島四郎	佐賀	重慶	重慶師範学堂教習	
副島善雄	佐賀	大冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司土木部員	
底非安三郎	福岡	漢口 大冶	製鉄所技師／漢冶萍煤鉄鋳廠公司機械部員	
外山修三	東京	永寧県 叙永	中学堂教習、眉州中学堂教習	
園田愛之助	兵庫	長沙 衡州	高等学堂教習、南路師範学堂教習	
園田光雄	熊本	長春	吉長鉄路局保線区長、満鉄養路課長兼工程課長	
藺部一郎	和歌山	雲南	雲南府高等学堂教習、雲南中等農学堂教習	
染川豊彦	鹿児島	北京	警部／高等巡警学堂教習	
太地周三郎	東京	武昌	陸軍下士／陸軍小学堂助教、陸軍学堂教習	東亜同文会報 告:98号
田浦安静	神奈川	広東	陸軍測量師／兩広陸軍測繪学堂総教習	
田岡正樹	高知	保定	陸軍軍官翻譯官、陸軍部速成学堂翻譯員	
多賀宗之	愛媛	保定 南京	陸軍歩兵少佐、陸軍歩兵大佐／陸軍学堂教習、陸軍部速成学堂教習、江蘇將軍軍事顧問、江蘇督軍軍事顧問、江蘇督軍署軍事顧問、江蘇督軍署顧問	
高桑良興	石川	武昌	武普通学堂教習、文普通学堂教習	東亜同文会報 告:98号
高島大二郎	京都	雲南	東文学堂教習、高等学堂教習	

高島 信	東 京	南 京	陸軍下士／陸軍測繪學堂教習	
鷹巢福市	兵 庫	天 津	陸軍醫學堂教習	
高洲太助	山 口	楊 州	領事／淮南塩務稽核分所協理、淮南塩務稽核分所所長	
高左右愛之助	東 京	武 昌	製革廠技師	
高田九郎	熊 本	蘇 州	江蘇兩級師範學堂教習	
高野四郎	北海道	北 京	逓信技師／交通部電改司工程司兼教習	
鷹野該吉	兵 庫	宣 順	自流井私立樹人學堂教習	
高橋徳衛	福 島	杭 州	浙江醫葯學專門學校教習	
高橋 勇	福 島	北 京	京師大學堂師範館教習	大阪毎日:1909年 1月21日
高橋剛吉	滋 賀	天 津	文部省醫術開業試驗委員／北洋軍醫學堂教習	東亜同文會報 告:107号
高橋寅治	秋 田	大 沽	第八師團法官部録事／北洋憲兵學堂翻譯、北洋師範學堂教習	
高橋太吉	宮 城	保 定	岩手県立農學校教諭／高等農業學堂教習、直隸中等農業學堂教習	
高橋正一	徳 島	雲南府	大阪府立農學校教諭／雲南中等農學堂教習、雲南農業學校教習、農業學校教習兼農事試驗場技師	
高橋 徹	広 島	南 寧	予備陸軍一等主計／南寧講武堂教習	
高橋義信	山 形	雲南府	高等警察學校教習	
高橋正雄	福 島	北 京	陸軍歩兵大尉／陸軍大學校教官	
高橋 漸	長 崎	開 封	普臨電氣公司技師／開封電燈公司技師	
高淵啓之助	茨 城	南 昌	官營南昌製革所技手	
高山アイ	青 森	開 封	河南省尉氏県東華英女学	
瀧口定次郎	千 葉	彭山県	師範學堂教習	
瀧澤賢四郎	東 京	福 州	宮城県師範學校教諭／福建武備小學堂教習	
瀧澤 斌	長 野	長 沙	湖南高等師範學校教習	
瀧本 潔	熊 本	天 津	北洋師範學堂教習	
田口国栄	長 崎	四平街	四鄭鐵路局運輸課員、車務課課長	
宅野 潔	山 口	濟 南	山東法政學堂教習	
武井ハツ	東 京	武 昌	武昌幼稚園保母	
武居重雄	長 野	長 春	吉長鐵路局工廠監	
武田芳枝	兵 庫	杭 州	九成織綢公司織物工	
竹中多嘉	東 京	常 徳	常德府蒙養院教員	
竹中政一	兵 庫	四平街	神戸高等商業學校卒業／滿鉄入社、撫順炭鉱勤務、大連駅勤務助手、長春駅助役、	

			運輸部旅客主任、四鄭總工程局運輸主任、四鄭總工程局運輸主任兼課長、奉天地方事務所長、北京公所長經理部長、理事	
竹林寅造	東京	肇慶	肇慶府中学堂教習	
竹村孝太郎	京都	長春	吉長鐵路局會計課長、滿鉄計理課長	
竹本鏡太郎	静岡	安東	外務省警部／安東巡警局警察教習	
竹山良治	東京	北京	農工商部中等工業学堂教習	
竹山規矩郎	静岡	四平街	四鄭總工程局事務課員、四洮鐵路局雇員(機関手)	
田澤時四郎	新潟	常德	佐渡中学校教員／西路師範学堂教習	
田澤禮二	東京	長春	吉長鐵路局副站長、滿鉄副站長	
田添幸枝	熊本	成都	女子師範学堂教習	
多田政固	東京	太原	愛知県視学／山西師範学堂教習	
多田治作	山口	長春	吉長鐵路局工務員、滿鉄工務員	
橘量	大分	鎮江	八旗中学堂教習	
橘協	東京	成都	鉄道技師／鉄道学堂教習	大阪毎日:1907年6月27日
橘儀一	北海道	北京	東北帝国大学農科大学副手／農科大学教習	
龍岡照子	鹿児島	安慶	安徽女子師範学堂教習	
巽健雄	北海道	蘇州	江蘇兩級師範学堂教習	
立石保福	長崎	四平街	四鄭總工程局事務主任	
田中富蔵	鹿児島	四平街	線路建設補助員	
田中啓次郎	広島	九江	南潯鐵路公司技師、南潯鐵路公司工程師	
田中夏太郎	長野	昌圖	陸軍二等看護長／昌圖病院助手	
田中萬次郎	京都	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習	
田中久蔵	東京	西安	師範学堂教習	
田中喜代三	東京	杭州	私立鐵路業務学堂教習	
田中勇吉	東京	北京	農工商部中等工業学堂教習	
田中正夫	和歌山	武昌	鉄道技師／粵漢線技師	
田中雄之進	東京	成都	陸軍測繪学堂教習	
田中起長	鹿児島	奉天	材料課課長	
田辺利男	兵庫	四平街	東京帝国大学工学部卒業／滿鉄入社、四鄭鐵路局技師、長春保線係主任、長春鉄道事務所参事・所長代理、鉄道建設局次長兼計画課長	
田辺熊三郎	東京	揚州	公使館一等書記官／淮南塩務稽核分所補	

		杭 州	助員、兩浙塩務稽核分所協理	
田邊増太郎	熊 本	長 春	吉長鐵路局副站長、滿鉄副站長	
谷 環	愛 媛	北 京	農商務省実習練習生／農工商部工芸局教習	
谷 武松	東 京	南 京	陸軍測繪学堂教習	
谷 寛夫	兵 庫	北 京	歩兵大尉／陸軍大学兵学教官	
谷 清	徳 島	長 春	後備陸軍三等主計／吉長鐵路局運輸課員、滿鉄代表室員	
谷井鋼三郎	東 京	成 都	鐵道学堂教習	
種村吉雄	山 形	三 原	工業学校教師、省立工業学校教諭	
玉井清耀	東 京	長 春	滿鉄計理課長	
玉木薫蔵	島 根	武 昌	湖北法政学堂教習	大阪毎日:1908年 10月8日
玉林從純	長 崎	鉄 嶺	陸軍通訳、東亜同文書院商務学士／清国衙門囑託翻訳委員、鉄嶺県署囑託翻訳委員、大連取引所信託株式会社、開原取引所、朝鮮銀行	
田村米吉	東 京	南 京	江蘇省立第一工業学校教習	
田村理太郎	群 馬	成 都	小学堂教習	
田村美壽	山 梨	温 州	千葉県女子師範学校教師／師範学校教習	
田村八十治	神奈川	南 京	江蘇省立第一工業学校教習	
壇上謙彌	広 島	保 定	保定公立農業専門学校教習	
筑 芳之助	愛 知	武 昌	湖北高等工業学校教師	
築島信司	広 島	四平街	東京帝国大学卒業／滿鉄入社、鉄嶺駅助役、開原駅長、運輸主任兼運輸課長、車務総管兼処長、社長室文書課長、哈爾濱事務所長、炭鉱部次長	
知念嘉真	沖 縄	安 慶	安徽中等工業学堂教習	
樗木耕一	鹿兒島	蘇 州	陸軍少佐／武備学堂総教習	
塚田良介	山 形 石 川	北 京 三 原	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習、工業学校教師、省立工業学校教諭	
月原秀範	長 野	天 津	北洋師範学堂教習	
佃 一豫			直隸総督袁世凱顧問	大阪毎日:1905年 9月28日 東京朝日:1905年 9月1日 東洋時報:125号
辻 啓一郎	山 梨	奉 天	京奉鉄道工夫、京奉鐵路建築工夫	
辻 武雄	熊 本	蘇 州	江蘇兩級師範学堂教習、江南実業学堂教	

		南 京	習	
辻 信一	和歌山	成 都	滋賀県師範学校教諭／高等学堂教習	
辻 安彌	東 京	杭 州	浙江高等学堂教習	
辻 利三郎	佐 賀	北 京	農工商部中等工業学堂教師	
辻 勝太郎	宮 城	彭 県	銅鋳局技手	
辻 勝治郎	秋 田 宮 城	東 川 彌 勒	東川鋳業股份有限公司技師、路南鋳業公司技師	
辻 暎	東 京	濟 南	陸軍通訳／山東塩運使東道緝和委員	
辻川喜代松	大 阪	杭 州	緯成株式会社織物師	
辻野朔次郎	福 井	北 京	東京郵便電信学校卒業、通信技師／北京電話局総工程司兼電話学堂監督、北京電話総局工程司兼監督、北京電話総局工程司兼総管、北京電話総局技師長兼総管、交通部技師、北京同学会語学学校校長、北平育成学校理事、日本居留民会副会頭	東京日日:1908年 8月25日 北 京 档 案 史 料:1998年2期
土田兎四造	東 京	北 京	東京理科大学助手／京師大学堂	
土田忠治	静 岡	福 州	島根県立第二中学校長／全閩師範学堂教習、福建師範学堂教習	
土屋隆博	愛 媛	広 東	砲兵大尉／両広陸軍速成学堂教習	
土屋熊三郎	長 野	南 京	江寧初級師範学堂教習	
土屋禎二	東 京	北 京	審計院外債稽核員、審計院外債室室長	
常田武子	北海道	北 京	淑慎女学堂教習	
常吉徳壽	佐 賀	北 京	大蔵省税務監督官／財政部税務調査委員	税務月刊:2 卷 14 号 天津大公報:1915 年 1 月 29 日・30 日
坪田彌太郎	兵 庫	長 春	吉長鐵路局工廠監	
津村哲太郎	山 口	武 昌	農務学堂教習	
鄭 永昌	東 京	天 津	領事／長蘆塩務稽核分所所長、長蘆塩務稽核所所長、長蘆塩務稽核分所協理	
鄭 永邦	東 京	北 京	公使館一等書記官、大總統府諮議官	
手塚数雄	長 野	南 京	旅寧第一女学堂教習	東京日日:1907年 11月19日
手塚五郎	栃 木	長 春	吉長鐵路局副站長、滿鉄営業課員	
寺内信一	山 口	長 沙	佐賀県立有田工業学校長兼教諭／湖南公立高等工業学校教習	
寺尾熊次	北海道	長 春	吉長鐵路局営業課員、滿鉄営業課員	

寺木三二	和歌山	保定 天津	小学校正科正教員／初級師範学堂教習、 保定府模範学堂教習、直隸教育司教員	
寺澤 豊	大分	長春	吉長鐵路局報生、滿鉄運輸課員	
寺西秀武	石川	保定 武昌	陸軍歩兵大佐／陸軍軍官總教習、軍事顧 問幕僚、将軍府顧問	大阪毎日:1909年 7月19日
土井朝松	長崎	安東	熊本医学校卒業、陸軍三等軍医／巡警總 局衛生顧問	
土井常太郎	岡山	蘇州	法政学堂教習	
土肥原賢二	岡山	北京 齊齊哈 爾	陸軍歩兵大尉、陸軍歩兵少佐／大總統府 軍事研究幫弁、督軍府軍事弁事員	
堂前清次郎	福井	奉天	保線課課員	
藤堂良讓	三重	成都	優級師範学堂教習	
徳永熊五郎	熊本	成都	佐賀県中学校教諭／東洋予備学堂教習、 華陽学堂教習	
徳満早苗	鹿兒島	普安庁	師範学堂教習、陸軍小学堂教習	東亜同文会報 告:79号
都甲 昂	大分	保定	和歌山県師範学校教諭／直隸師範学堂教 習、直隸優級師範学堂教授	
栃本 允	福島	四平街	四鄭鐵路局技術員、四鄭總工程局技手	
土橋順之助	鹿兒島	温州 福州	予備陸軍工兵少尉／高等学校教習兼師範 学校中学校教習	
土橋了丈	鹿兒島	福州	女子師範学校教習	
飛松常磐	佐賀	保定	公立東文学堂教習、陸軍軍官学堂教官	
苔米地四楼		雲南	陸軍大尉／高等軍事学校教官	
富田已十	埼玉	長春	滿鉄計理課長	
富永馬吉郎	東京	奉天	奉天森林学堂教習	
富永三生	熊本	奉天	奉天外国語専門学校教習	
富長徳蔵	秋田	杭州	浙江高等学堂教習	
富久達三郎	福岡	四平街	鉄道院技手／四鄭鐵路局技手、四鄭總工 程局技師	
鳥谷部政人	静岡	蘇州	江蘇兩級師範学堂囑託	
豊岡茂夫	福岡	成都	岡山県師範学校教諭／中央師範学堂教習	
豊田五郎	内江県	夔州	中学堂教習	
豊田狐寒		曹州	曹州府普通学堂教習	
豊田神尚	富山	濟南	優級師範学校教習、山東優級師範学堂教 習、山東高等師範学校教習兼法政学校教 習	
鳥井龍蔵		喀喇沁	東京帝国大学教授／喀喇沁王府傭聘、燕	東洋時報:124号、

		北京	京大学歴史系教授	125号、131号、 132号 北京档案史料: 1998年2期
鳥居信平	静岡	太原	農商務省嘱託員／山西高等農林学堂教習	
鳥原忠次郎	京都	杭州	悦昌文記織物師	
頓宮 寛	香川	大冶 漢口	漢冶萍煤鉄鉞廠公司病院長	
内藤亥三郎	新潟	遼陽	医学専門学校済生学舎／遼陽官設医院藥劑師、遼陽州官設医院藥劑員、遼陽県官設医院藥劑員	
直江勝朗	東京	北京	東京高等工業学校師範工／芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教師	
直江光次	新潟	保定	北海道師範学校教諭／直隸優級師範学堂教習	
永井直五郎	鹿児島	奉天	種芸助手	
永井勇助	宮城	保定 天津	東京府立川中中学校教諭、東京府立第二中学校教諭／直隸師範学堂教習、直隸優級師範学堂教授、直隸高等師範学校教習	
永井正直	愛知	南京	寧属初級師範学堂教習	
永井元吉	宮城	蘇州	江蘇兩級師範学堂教習	
中江丑吉	東京	北京	大總統法律顧問助手	
永尾龍造	山口	安東	東亜同文書院卒業／岫巖州師範教育、満鉄撫順炭鉞庶務課、総務部調査課、鉞業部庶務課長代理、営口水道電気株式会社取締役、営口商業会議所特別議員	
中川勝三郎	東京	北京	芸徒学堂教員／農工商部中等工業学堂教習	
中川文昱	愛知	保定	陸軍部速成学堂教習	
中川良作	広島	大冶 漢口	漢冶萍煤鉄鉞廠公司機械課長	東亜同文会報告: 98号
中川増蔵	大阪	長春	吉長鉄路局運輸課長、満鉄運輸課長兼營業課長	
中北嘉兵衛	三重	奉天	満鉄計理課員	
中桐確太郎	福島	杭州	全浙兩級師範学堂教習	
中久喜信周	東京	武昌	方言学堂教習	
中澤延太郎	佐賀	福州	後備陸軍歩兵軍曹／工業専門学校教習、福州電気公司技手	
中澤幸次郎	東京	天津	印刷局勤務／北洋官報局技手	

中澤政太	長野	天津	大阪警察部技師／天津工芸学堂教習	
中澤 澄	山梨	西安	師範学堂教習	
中澤光雄	長野	長春	吉長鐵路局運輸課員	
中島完一	岐阜	北京	陸軍工兵大尉、陸軍工兵少佐／陸軍大学 校教官	
中島 縣	山口	長春	吉長鉄道会計所翻訳員、吉長鉄道会計課 員、吉長鐵路局会計課員	
中島半次郎	熊本	天津	北洋師範学堂教習	報知:1910年1月 5日・11日 早稲田学報:140 号、146号、150 号、164号、167 号、180号、181 号 中央公論:22卷9 号、23卷9号
中島比多吉	埼玉	保定	陸軍軍官翻訳官、陸軍軍官学堂翻訳官	
長島忠三郎	栃木	天津	天津工芸学堂教習	
中瀬瀨二	岡山	四平街	事務	
永瀬九七	栃木	杭州	工業学校教習	
中田義算	山梨	大冶 漢口	漢冶萍煤鉄鋳廠公司機械技師、漢冶萍煤 鉄鋳廠公司築炉部長	
中田 醇	東京	保定 杭州	農商務省技手／北洋陸軍馬医学堂教習、 農業学校教習	
中田為三		武昌	陸軍下士／陸軍小学堂助教	東亜同文会報 告:98号
中谷延治	三重	保定	東京高等師範学校教諭／直隸師範学堂教 習、直隸優級師範学堂教授	
中津三省	熊本	保定	直隸法政学堂教習	
中根彌吉	東京	四平街	四鄭総工程局事務課員、車務段長	
中野太郎		武昌	方言学堂教習	東亜同文会報 告:98号
中野光藏	神奈川	吉林	農業学堂教習	
中野鑄太郎	石川	北京	北京医学専門学校助教員	
永野定次郎	東京	北京	京師大学堂	
中村順之助	福島	安東	福島県庁より派遣され東亜同文書院で研 修／安東軍政署囑託／安東知県衙門顧問	
中村綱一	熊本	天津	北洋法政専門学堂医官	
中村正一	熊本	保定	工兵大尉／陸軍軍官教習	

中村信三郎	宮 城	蘇 州	江蘇兩級師範学堂教習	
中村 襄	福 島	北 京	京師法律学堂教習	太陽:15 卷 11 号
中村 仲	愛 知	天 津	北洋法政専門学堂教習	早稲田学報:167 号
中村重臣	茨 城	武 昌	軍医学堂教習	
中村孝文	東 京	南 寧	予備歩兵大尉／南寧講武堂教習	
中村ミヨウ	岐 阜	四平街	教員	
中村秀一	山 形	長 春	吉長鐵路局検車員、滿鉄監工	
仲元正秀	東 京	奉 天	東京外国語学校卒業／滿鉄運輸部営業課、安東駅貨物係主席、四洮鐵路局車務審査科長、計核課課長	
中山金次郎	東 京	北 京	芸徒学堂教員、農工商部中等工業学堂教習	
中山龍次	新 潟	北 京	逓信技師／交通部電政顧問	東京朝日:1913 年 6 月 30 日
名川彦作	新 潟	資 州	達用学堂教習、資州師範学堂教習	東亜同文会報告:79 号
奈須省吾	山 形	常 徳	西路師範学堂教習	
納富四郎	佐 賀	保 定	後備陸軍特務曹長／陸軍軍官教習、陸軍軍官学堂教官	
鍋島キサ	福 井	杭 州	緯政株式会社撻糸師範	
鍋谷ツキ	京 都	杭 州	緯政株式会社撻糸師範	
檜崎一郎	熊 本	保 定	陸軍軍官教習兼通訳官	
檜崎一良	熊 本	保 定	陸軍速成学堂教習	
成田清作	長 崎	四平街	線路建設補助員	
成田練之助	鹿兒島	漢 口	既済水電公司営業顧問	
成松静雄	熊 本	長 沙	私立麻布獣医学校教師／湖南中等農業学校教習、湖南省立甲種農業学校教習	
南洞 孝	岩 手	奉 天	東亜同文書院卒業／奉天兩級師範学堂教習、奉天法政学堂教習兼務、奉天商業会議所書記長	
南洞温三	岩 手	北 京	農工商部中等工業学堂教習	
南浮智成	滋 賀	武 昌	陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	日本:1906 年 1 月 1 日 東亜同文会報告:98 号
西 紋太郎	鹿兒島	四平街	鉄道院技手／四鄭鐵路局技師、四鄭総工務局技師	
西岡永太郎	徳 島	蘇 州	江蘇兩級師範学堂教習	

西川嘉一	東京	遼陽	予備陸軍三等軍医／遼陽官設医院医師、遼陽県官設医院医師
西澤勇志智	東京	太原	山西農林学堂教習
西田栄次郎	東京	天津	印刷局勤務／北洋官報局技手
西村多壽	長野	昌圖	陸軍三等軍医／昌圖府顧問医官
西村豊太郎	福岡	天津	北洋防疫医院教習
西山栄久	長野	安慶	安徽師範学堂教習
新田徳兵衛		南昌	予備陸軍曹長／陸軍被服廠長
新田覚三	富山	蘇州	江蘇高等学堂教習
新田覚二	富山	成都	高等学堂教習
二宮猪一郎	埼玉	安慶	安徽中等工業学堂教習
根崎元良	島根	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教師
根本房次郎	千葉	長春	吉長鉄道機関手取締
能村修	徳島	貴陽	歩兵少佐／貴州督軍署軍事顧問
野口芳子	千葉	北京	慧仙女学堂教習
野口次郎	愛知	保定 天津	陸軍三等軍医正／北洋陸軍馬医学堂総教習、陸軍馬医学堂総教習
野崎鉄司	東京	南京 福州	陸軍下士、後備陸軍砲兵曹長／江南講武堂正教習、福建省機器局軍機官
野崎常蔵	鳥取	成都	東京府中学校教諭／優級選科師範学堂教習、優級師範学堂教習
野崎文吉	新潟	長春	吉長鉄路局現業助手、満鉄站務司事
野澤悌吾	新潟	天津	歩兵中佐／総督府督練所翻訳官、総督府督練所
能勢頼俊	山梨	長沙	東京府視学／優級師範学堂教習
野田昇平	鹿児島	北京	宮崎中学校教諭／京師大学堂
信谷友三	東京	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習
野村茂	石川	成都	高等師範学堂教習
芳賀亀太郎	岩手	南京	江南実業学堂教習
芳賀千代吉	福島	長春	吉長鉄路局工廠長、満鉄工廠員
芳賀良太	福島	武昌	電灯公司技師
萩原昌彦	秋田	奉天	中央大学卒業／奉天省立農事試験場牧羊司事
萩原繁太郎	兵庫	長沙	湖南高等師範学校教習
橋上亀次	高知	済南	陸軍憲兵曹長／済南警察庁警務副委員、山東省会警察庁副委員
橋口三次郎	佐賀	福州	東京工業教校雇実習科教員／工業学校教

			習、工業専門学校教習兼工芸練習所技師、公立工業専門学校教諭	
橋本五作	山形	済南	埼玉県師範学校教諭／高等学堂東文教習	
橋本福造	東京	広東	沖縄県師範学校教諭／両広優級師範学堂教習	
橋本遥貞	佐賀	成都	磨麵公司技手、磨麵官廠技師	
橋本真二	熊本	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司土木部員	
長谷川清吉	三重	南京	江蘇省立第一工業学校教習	
長谷川貞三郎	京都	杭州	工業学校機械科実習教範	
長谷川楯雄	京都	福州	電気公司技師、福建電話公司技師	
長谷川 巖	岐阜	太原	陸軍歩兵少尉／山西陸軍小学堂教習	
畑中音吉	三重	杭州	工業学校鉄工師	
原武八十一	福岡	奉天	満鉄工務員	
八田光二	佐賀	済南	法政学堂教習	
初田喜一	東京	杭州	緯成株式会社機械工	
服部升子	福島	奉天	奉天女子師範学堂教習	
服部宇之吉	東京	北京	東京帝国大学教授／京師大学堂師範館正教習	都新聞:1909年1月19日、1910年4月7日 東京日日:1905年10月6日、7月31日、1908年8月25日、1909年11月9日 報知:1908年7月15日、1909年1月18日・24日、8月8日 大阪毎日:1909年1月19日・21日 東京朝日:1910年5月19日 太陽:12巻12号 東亜同文会報告:99号、110号、112号、118号、119号 東洋時報:124号、127号

				中央公論:24 卷 3 号 日 本 及 日 本 人:531 号
服部 操	兵 庫	成 都	東洋予備学堂教習	
服部元彦	東 京	南 京	江南実業学堂教習	
服部孝之助	大 阪	福 州	郵務管局乙班四等司賬	
服部 保	兵 庫	四平街	四鄭総工程局技師	
花岡善之	長 野	蘇 州	振興電燈公司技師	
馬場梅吉	愛 知	醴 陵	醴陵磁業学堂実習教師	
馬場駒雄	岡 山	天 津	水産講習所助手／直隸水産学校教習、直 隸省立甲種水産学校教習	
濱 マツ	長 野	広 東	女学校教員／両広官立女子師範学堂教習	東京朝日:1907 年 5 月 20 日
濱崎ウメ	鳥 取	瀘 州	女子師範学堂教習	
濱田義徳	熊 本	北 京	芸徒学堂教員	
早川記作	東 京	南 京	江南中区医院雇医師	
早川正文	福 島	武 昌	農務学堂教習	
林 亀吉	鹿兒島	四平街	線路建設補助員	
林 房吉	徳 島	太 原	山西師範学堂教習	
林強一郎	長 崎	武 昌	鉄道技師／湖北鉄道顧問官、川漢線技師	
林 岩吉	千 葉	武 昌	粵漢線技師	
林出賢次郎	和歌山	迪 化	法政学堂教習	
早瀬熊太郎	兵 庫	広 東	鉄道院工夫／粵漢鐵路公司工夫	
早瀬頼二	岡 山	四平街	満鉄入社、奉天事務所、東京支社、四鄭 総工程局事務員、工務課員、四洮鐵路局 車務処計核課長、両用輸入組合理事、満 州輸入組合連合会理事兼東京出張所長、 同大阪出張所長	
原 清明	佐 賀	成 都	鉄道学堂教習	大阪毎日:1907 年 6 月 27 日
原 曾平	長 野	広 東	輜重兵曹長／両広陸軍速成学堂教習	
原 紋蔵	神奈川	奉 天	吉長鐵路局站司事	
原岡 武	大 分	北 京	日文教員、稅務学堂教員、稅務学堂教授	
原口 要		武 昌	逓信省鉄道顧問／湖北鉄道顧問官	都新聞:1908 年 3 月 12 日 東京朝日:1905 年 12 月 31 日 報知:1909 年 4 月

				3日、9月2日・3日、9月18日・25日 大阪毎日:1908年2月25日、6月12日、1909年3月14日、4月11日、9月2日 太陽:13卷1号 東洋時報:133号 東亜同文会報告:98号
原口種次	鹿児島	漢口	既済水電公司電気技師、沙市電燈公司顧問	
原口武雄	東京	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教習	東京日日:1908年8月25日
原田俊三郎	栃木	天津	外務省警部/天津巡警総稽查官、天津警察庁警務教習、天津警察庁警務顧問	
原田長松	鳥取	長沙	長野県師範学校教諭/優級師範学堂教習	
原田勤次郎	愛知	福州	福建工芸伝習所技師	
春田政子		干崖		
春山雪子	東京	長沙	小学校訓導/蒙養院教員	
坂西利八郎	東京	天津 北京	歩兵中佐、陸軍砲兵大佐、陸軍少将、陸軍中将/総督府督練所翻訳官、大總統府直屬軍事研究員	東京朝日:1913年6月30日 都新聞:1910年3月22日 東京日日:1908年4月26日
半澤徳四郎	新潟	長春	満鉄站務司事	
桧垣精三郎	東京	南京	両江師範学堂教習	
東元三郎	大阪	大沽	憲兵曹長/北洋憲兵学堂総教習	
東登一郎	鹿児島	牛莊 營口	関東都督府警部兼外務省警部/營埠巡警総局警務教習、營口警察庁警務教習、警察顧問	
東豊次	広島	長春	吉長鉄路局工務課員	
樋口千五郎	新潟	太原	山西高等農林学堂教習	
久山郷次郎	大阪	江北	江北何鹿蒿瑠璃廠技手	
土方亀次郎	兵庫	南京	陸軍下士/陸軍測繪学堂教習	
菱沼トキヨ	宮城	杭州	私立浙江工芸女学堂教習	

平井平次郎	埼玉	濟南	農林学堂教習	
平井泉	山梨	寧波	寧波法政学堂教習	
平井晴二郎	東京	北京	鐵道院副總裁、貴族院議員／交通部顧問	東京朝日:1913年 6月30日
平賀精次郎	山口	天津	陸軍二等軍医正／北洋軍医学堂總教習、 医事顧問、陸軍医学堂總教習	東京日日:1905年 8月30日、1909 年10月6日 大阪毎日:1911年 4月24日 早稲田学報:168 号 東亜同文会報 告:107号
平瀬松太郎	京都	杭州	虎林株式会社織物紋様師、緯成株式会社 織物紋様師	
平田利作	広島	長春	滿鉄監工	
平田恵治	千葉	奉天	吉長鐵路車房長	
平野又助	岩手	成都	四川高等学校教習	
平山武清	鹿児島	保定	陸軍軍官翻譯官	
広瀬吉彌	新潟	成都	優級師範学堂教習	
広瀬竹三郎	北海道	長沙	湖南中等工業学校付属初等工業学校教習	
広瀬辰三	東京	奉天	吉長鐵路公務所工程司	
広田藤治	東京	貴陽	文通書局技手	
府上金三郎	大阪	雲南府	雲南府陸軍製革廠技師	
福井寛	三重	濟南	農林学堂教習	東亜同文会報 告:83号
福井直秋	富山	杭州	全浙兩級師範学堂教習	
福島鏡太郎	東京	広東	兩広陸軍測繪学堂教習、広東陸軍測繪学 堂教習	
福島秀雄	長崎	西安	西北大学教授	
福田実	愛知	南京	陸軍下士／江南講武堂正教習、江南陸軍 講武堂助教	
福田與五郎	長崎	長春	吉長鐵路局工務員、滿鉄工程手、滿鉄工 程司	
福地秀雄	長崎	北京 西安 長安県	佐賀県有田工業学校教諭／芸徒学堂教 習、農工商部中等工業学堂教習、西北大 学教習、西北法政専門学校教習	
福地冬太郎	東京	成都	肥皂官廠教習	
福村吉兵衛	鹿児島	長春	滿鉄監工	

福山惟吉	熊本	濟南	山東高等師範学校教習	
富士省三	宮城	武昌	農務学堂教習	
藤井恒久	石川	天津	天津工芸学堂教習、天津工芸学堂顧問、 実業調査員囑託	東京日日:1905年 8月31日 東亜同文会報 告:107号
藤井正二	福井	杭州	虎林株式会社織物紋様師、緯成株式会社 織物紋様師	
藤井工一	山口	杭州	緯成株式会社撚糸師範	
藤川勇吉	三重	重慶	重慶中学堂教習	
藤崎三郎		武昌	鐵道技師/湖北鐵道顧問官	
藤田経定	東京	大冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司顧問、漢冶萍煤鉄鋳 廠公司技師	
藤田喜代作	青森	奉天	農場試驗場技手	
藤田秀太郎	福岡	天津	北洋軍医学堂教習	
藤田新一	大分	天津	北洋大学堂医官	
藤田豊八	徳島	蘇州	江蘇兩級師範学堂總教習	太陽:11卷14号 日本人:3号、55 号、125号、137 号、141号
藤田積造	神奈川 佐賀	広東	両広法政学堂教習	
藤田語郎	大分	天津	天津工芸学堂校医	
藤波周吉	大阪	雲南府	雲南府陸軍製革廠技師、雲南府製革廠技 手	
藤根壽吉	大阪	四平街	京都帝国大学卒業、第五高等学校工学部 教授、鐵道院技師/四鄭鐵路局技師長、 四鄭總工程局技師長	
藤林実	福岡	大沽 天津	陸軍憲兵特務曹長/北洋憲兵学堂總教 習、北洋師範学堂教習	
藤原潤平	京都	三原府	高等工業学堂色染工師	
二村市良	福岡	奉天	鐵道院九州鐵道管理局勤務/滿鉄監工	
船岡獻治	新潟	南京 武昌	陸軍砲兵少佐/寧属初級師範学堂教習、 農務学堂教習	
船津常吉	富山	北京	北京大学農科大学教授	
古川岩太郎	兵庫	南京	陸軍砲兵少佐/江南陸軍講武学堂正教習	
古川徳三郎	千葉	四平街	運輸課員	
古川米吉	岐阜	營口	医術開業試験合格、後備二等軍医/警察 医務顧問	

古田和三郎	茨城	北京	陸軍陸地測量師／陸軍部測繪學堂翻譯官、高等巡警學堂教習	
別府彦麿	鹿兒島	濟南	警視庁警部／山東警務學堂教習、山東高等警務學堂教習	
法貴慶次郎	京都	北京	東京高等師範學校教諭／京師大學堂師範館教習	大阪毎日:1909年1月21日
保科義雄	長野	長沙	和歌山県立農林學校教諭／湖南公立高等師範學校教習	
細井貫了	滋賀	蘇州	江蘇兩級師範學堂教習	
細岡儀三	京都	奉天	吉長鐵路工廠監工	
堀井覺太郎	愛媛	長沙	明德學堂教習	
堀井仁	兵庫	奉天	奉天衛生醫院通訳	
堀江辨太郎	京都	成都	高等工業學堂教習、四川公立工業專門學校教習、四川内務課管份有限公司技師	
堀越順三郎	茨城	營口	憲兵大尉／巡警總局教習	
堀米代三郎	東京	奉天	歩兵大尉／營務所翻譯官	
本庄繁	兵庫	奉天	陸軍歩兵大佐／奉天督軍軍事顧問	
本多勘四郎	千葉	武昌	陸軍下士／陸軍小學校助教、陸軍學堂教習	東亜同文會報告:98号
本多厚二	長崎	杭州	全浙兩級師範學堂教習	
本田利実	宮崎	杭州	師範學校教諭／師範學堂教習	
本土源次郎	長崎	成都	長崎県中學校教諭／客籍學堂教習、中等農業學堂教習	
本堂直枝	熊本	保定	陸軍學堂教習	
本間二十八	北海道	天津	直隸省立甲種水産學校教習	
本間亮	静岡	新民	予備陸軍看護長／新民府衛生局雇	
本間平八	北海道	天津	小學校本科正教員、教科教授／直隸第一師範學校教習	
前田誠吾	兵庫	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司技師	
前田茂子	高知	奉天	奉天女子師範學堂教習	
前田新子	東京	奉天	第一蒙養院保姆、奉天第二蒙養院保姆	
前田岩吉	熊本	奉天	方言學堂教習	
前田愛之進	鹿兒島	北京	警視庁警部／高等巡警學堂教習、内務部警察學校教習	
真壁政人	岡山	南京	陸軍下士／江南講武堂正教習	
曲尾辰二郎	東京	奉天 長春	逡信省鉄道技師／京奉鐵路工程司、遼河以東總工程司、吉長鉄道技師、吉長鉄道技師長、吉長鐵路總工程司、吉長鐵路局總工程司	

牧 三亥	東 京	漢 口	講師囑託	
牧 胤義	鹿兒島	奉 天	吉長鉄路局司事	
牧野田彦松	宮 城	天 津	総督府督練所翻訳官	
正木直太郎	長 野	安 慶	安徽師範学堂教習	
増井茂雄	三 重	遼 陽	陸軍通訳／遼陽巡警総局顧問、遼陽州警務局顧問、遼陽県警務局顧問	
増井茂松	三 重	遼 陽	陸軍通訳／遼陽県警察局顧問、遼陽県警察事務所顧問	
増田又七	埼 玉	營 口	營口軍政署技士／營口工程総局正工程司	
増田真吉	福 岡	南 京	両江師範学堂教習	
益田勝利	東 京	天 津	印刷局勤務／北洋官報局技長	
升田禮吉	大 分	成 都	高等工業学校職業教授、四川公立工業専門学校職業教授	
今西八百造	兵 庫	杭 州	緯成株式会社染物師範	
町野武馬	福 島	北 京 奉 天	陸軍歩兵大尉、陸軍歩兵少佐、陸軍歩兵中佐／高等巡警学堂正教習、内務部警察学校総教習、奉天上將軍軍事顧問、奉天將軍府軍事顧問、奉天督軍顧問兼奉天省長警察顧問、東三省巡閱使顧問兼警察顧問、張督軍顧問	
松井彌三郎	石 川	醴 陵	醴陵磁業学堂・醴陵磁業公司模範職工	
松井藤吉	岐 阜	北 京	京師大学堂付属博物実習	
松井林太郎	広 島	新民府	岡山医専卒業、予備陸軍三等軍医、岡山医学専門学校／検疫医	
松浦三左衛門	福 島	奉 天	京奉鉄路建築工夫	
松浦秋作	群 馬	南 京	両江師範学堂教習、両江師範学堂総教習	
松浦勝太郎	長 崎	成 都	農業学堂教習	
松岡義正	東 京	北 京	東京控訴院判事、大審院判事／修律調査員・法学教習、京師法律学堂教習、欽命修訂法律館調査員	太陽:15 卷 10 号
松岡貞吉	東 京	南 京	南洋印刷局技師	
松川政五郎	福 島	濟 南	山東工業専門学校教授	
松清 嵩	鹿兒島	四平街	四鄭鉄路局事務員、四鄭総工程局事務員	
松崎幸三郎		武 昌	陸軍下士／陸軍小学堂助教	東亜同文会報告:98号
松里政登	福 岡	西 安	岡山県師範学校教諭／高等師範学堂教習	
松里志磨	福 岡	福 州	福州女子師範、女子職業学堂教習	
松下敬次（敬治）	兵 庫	奉 天	奉天師範学堂教習、奉天両級師範学校教習	

松下荘作	静岡	太原	山西高等農林学堂教習	
松島良吉	岩手	杭州	工兵特務曹長／陸軍砲工学堂教習	
松島義男	鳥取	蕪湖	大昌火柴公司技手	
松田源吉	京都	杭州	工業学校鉄工師	
松田鉄代	岩手	南京	恵寧女学堂、毓秀女学堂教習	
松田 等	三重	長沙	陸軍一等軍医／湖南私立恵濟病院顧問	
松長長三郎	東京	天津	天津工芸学堂教習	
松永恒信	山形	廈門 雲南府	海関四等幫弁、交通部郵政課中華郵務官	
松野祐裔	千葉	濟南	法政学堂教習、山東公立法政專門学校教習	
松林義之	長崎	武昌	工兵大尉／陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	東亜同文会報告:98号
松村林平		武昌	陸軍下士／陸軍小学堂助教	東亜同文会報告:98号
松村壽頭	神奈川	広東	小学校長／両広高等工業学校教習	
松本円次郎	三重	營口	三重県庁勤務、内務省土木局勤務、工手 学校入学／營口軍政署雇員／營口工程総 局測量師	
松本秀雄	神奈川	北京	芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教師	
松本孝次郎	東京	南京	高等師範学校教授／両江師範学堂総教習	
松本亀次郎	静岡	北京	佐賀県師範学校教授・舎監／京師法政学 堂教習	
松本兵七	京都	成都	四川窯業試験所工手	
松本源次郎	京都	長沙	湖南公立中等工業学校教習	
松山謙受	熊本	法庫門	療病院医師	
松山亮蔵	岐阜	長沙	札幌中学校教諭／中路師範学堂教習	
松山豊造	和歌山	広東	第五高等学校教授／両広法政学堂教習、 広東法政学堂教習	
真水英夫	東京	北京	文部省技師／清国学部（京師大学堂新築 設計）	
間室直義	愛媛	保定	陸軍歩兵大尉／陸軍軍官教習、陸軍軍官 学堂教官	
真山総三郎	宮城	武昌	農務学堂教習	
丸野 豊	福岡	太原	福井中学校教諭／山西師範学堂教習	
丸山 豊	鹿児島	武昌	砲兵大尉／陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	大阪毎日:1906年 5月15日 東亜同文会報

				告:98号
丸山助藏	神奈川	南 寧	獣医／南寧講武堂教習	
丸山芳樹	鹿児島	長 春	吉長鐵路局工務主任	
三浦喜傳	熊 本	天 津	警視庁警視／天津警務学堂警務顧問兼教頭	大阪毎日:1906年 5月3日、1911 年4月24日 東亜同文会報 告:107号
三浦嘉七	山 口	奉 天	吉長鐵路稽核員	
三上豊二	青 森	奉 天	吉長鐵路副站長	
三木清二	東 京	成 都	新潟県中学校教諭／高等学堂教習	
三木善太郎	愛 媛	奉 天	陸軍砲兵大尉／東三省講武学堂教習	
三澤力太郎	長 崎	武 昌	両湖師範学堂教習	東亜同文会報 告:98号
三科 壽	山 梨	武 昌	私立医専門学校教師	
美代清彦	長 野	武 昌	滋賀県技師、農商務省技師／農務学堂教習	東亜同文会報 告:98号
溝添金助	鹿児島	漢 口 武 昌	湖北蚕業講習所技師	
水谷周治	愛 知	広 東	後備砲兵曹長／両広陸軍速成学堂教習	
水野 袁	東 京	漢 口	既済水電公司會計員	
三谷 新	広 島	蘇 州	江蘇高等学堂総教習	
三田村源次	福 井	營 口 奉 天	東亜同文書院卒業、陸軍歩兵大佐／商業 学堂教習、奉天商業学校教習、奉天商業 学校教習兼奉天外国語専門学校教習	
三本武重	高 知	長 春	満鉄代表兼運輸主任	
三戸章造	広 島	奉 天	農商務技師／奉天森林学堂教習	
皆川準一郎	新 潟	長 春	吉長鐵路局営業課員、満鉄運輸課員、副 站長	
南 諭吉	高 知	武 昌	農務学堂教習	
南崎 俐	宮 崎	長 春	吉長鐵路運輸課員	
峰 幸松	長 崎	奉 天	憲兵大尉／巡警総局総稽查	
峯旗良充	京 都	長 春 吉 林	天津高等学堂創設、天津高等学堂主任、 両級師範学堂教習、教育研究会講師、法 政学堂教習、師範学堂教習及中学堂教 習、吉林師範学堂教習及中学堂教習	
峯旗操子	京 都	長 春 吉 林	女子師範学堂教習、吉林女子師範学堂教 習	
宮内英熊	鹿児島	北 京	陸軍騎兵少佐、陸軍騎兵中佐／陸軍大学	

			校教官	
宮川漁男	福岡	天津	陸軍一等薬剤官／北洋軍医学堂教習、陸軍医学堂教習	大阪毎日:1911年4月24日
宮木慶次郎	千葉	成都	四川同仁教養工廠、欽新染織公司技師	
三宅恒三郎	広島	四平街	四鄭鐵路局技術員	
三宅喜代太		開封	高等学堂教習	
三宅縫造	岡山	杭州	予備砲兵少尉／陸軍砲兵学堂教習	
三宅市郎	岐阜	北京	北京大学農科大学教授	
宮崎良栄	神奈川	天津	天津工芸学堂教習	
宮崎仙三郎		武昌	助手	
宮島信太郎	北海道	吉林	農業学堂教習	
宮本秀彦	宮城	広東	工兵大尉／両広陸軍速成学堂教習	
三輪昌輔	東京	北京	陸地測量師／陸軍部測繪学堂翻訳官	
宗石 昂	福井	長春	吉長鐵路局営業課員	
村岡祥太郎	東京	天津	直隸学務所教習、直隸高等商業学堂内音楽講習所教習	
村上庄太	香川	北京	北京医学専門学校教員	
村上 寛	愛媛	長沙	湖南中等農業学校教習	
村瀬和一	東京	北京	逓信省通信官吏、練習所教官／北京電話学堂教習	
村田愨磨	東京	長春	東京帝国大学卒業／満鉄入社、大連駅助役、奉天駅助役、長春地方事務所長、吉長鐵路局運輸主任	
村谷幸雄	大分	南京 杭州	陸軍三等軍医、予備陸軍三等軍医／陸軍軍医学堂教習、陸軍測繪学堂教習、獣医養成所教官兼軍馬治療所獣医官	東亜同文会報告:81号
村中清司	佐賀	広東	両広法政学堂教習	
村山寛治	長野	福州	予備陸軍歩兵曹長／民国体育学校教習、体育学校教習	
村山(村上)久吉	福島	広東	歩兵曹長／両広陸軍速成学堂教習、広東陸軍講武堂教習	
村山留吉	東京	南京	南洋印刷局技師	
村山 壽	神奈川	成都	陸軍工兵大尉／陸軍速成学堂教習	
元橋義敦	東京	杭州	浙江高等学堂教習	
元吉八五郎	東京	南京	陸軍測繪学堂教習	
粉山逸也	愛知	保定	陸軍軍官教習兼翻訳官	
百瀬国三郎	長野	成都	鉄道学堂教習	大阪毎日:1907年6月27日
森 孫一郎	岐阜	西安	師範学堂教習	

森 恵梁	京 都	上 海	私立中国公学教習	
森 祐好	大 阪	南 京	両江師範学堂教習	
森 銀次郎	愛 知	成 都	中等工業学堂教習	
森 正次郎	長 崎	北 京	専売局参事兼大蔵書記官／財政部諮議員	
森井国雄	神奈川	安 東 奉 天	陸軍通訳／興鳳道顧問、奉天交渉司邦文 翻訳委員、奉天交渉署邦文翻訳委員	
森岡大次郎	兵 庫	營 口	衛生総局獣医士	
森川 勉	東 京	武 昌	東京第三高等女学校教諭／武普通学堂教 習、文普通学堂教習	東亜同文会報 告:98号
森澤己之助	大 阪	天 津	北洋官報局技手	
守住直幹	京 都	三原府	高等工業学堂機械技師	
守田福松	熊 本	法庫門	熊本医学校卒業、熊本病院等に勤務、公 使館守備隊付、予備陸軍三等軍医／療病 院医師、法庫門庁衛生医院顧問	
守田省二	大 分	遼 陽	予備陸軍三等獣医／屠獸場獣医、屠殺場 獣医	
守田藤之助	東 京	寧 波	四明専門学校教習	
守永彌惣次	山 口	保 定	陸軍歩兵少佐／陸軍軍官教習、陸軍軍官 学堂教官	
森本清蔵	兵 庫	奉 天	文部省視学官／奉天兩級師範学堂正教習	東亜同文会報 告:80号
森本 修	和歌山	福 州	台湾国語学校教諭／福建師範学堂教習	
森山武利	鹿兒島	天 津	外務省巡查／直隸省禁煙総局稽查員	
矢板 寛	栃 木	保 定	直隸法政学堂教習	
八木光貫	三 重	蘇 州	江蘇兩級師範学堂兼高等学堂教習	
矢口徳太郎	茨 城	南 寧 蘇 州	予備陸軍歩兵曹長／南寧講武堂教習、陸 軍学堂教習	
矢島保治郎	群 馬	成 都	陸軍測繪学堂教習	
安尾信太郎	鳥 取	太 原	歩兵特務曹長／山西陸軍小学堂教習	
安田乙吉	石 川	醴 陵	京都府立陶器試験場技手／醴陵磁業学堂 教習、醴陵磁業公司技師	
保田多喜次	大 阪	成 都	製革廠技工教師	
安成一雄	熊 本	天 津	名古屋高等工業学校教授／北洋師範学堂 教習	
柳川平助	佐 賀	北 京	騎兵中佐／陸軍大学教官	
柳澤広三郎	長 野	吉 林	仙台医学専門学校卒業、陸軍軍医／吉長 鉄路局公司医員	
矢野仁一	山 形	北 京	東京文科大学助教授／京師法政学堂教習	太陽:15卷11号
矢野ヨシエ	長 崎	南 京	江南女学堂教習	

矢部吉禎	東京	北京	東京帝国大学助教授／京師大学堂師範館教習	大阪毎日:1909年1月21日
山縣初男		雲南	陸軍中佐／軍事顧問	
山口政子	徳島	奉天	第一蒙養院保姆	東京朝日:1907年2月27日
山口安郎	佐賀	福州	歩兵特務曹長、予備陸軍歩兵特務曹長／福建武備小学堂教習、講武学校教官	
山口四郎	佐賀	北京	予備陸軍騎兵特務曹長／陸軍大学校教官、陸軍大学教授	
山口義勝	岡山	雲南府	行政公署実業司署斂業顧問	
山口盛秀	宮崎	奉天	満鉄計理員	
山崎隆一	長野	保定	鹿兒島高等農林学校助教授、盛岡高等農林学校教師、予備陸軍砲兵少尉／高等農林学堂教習、保定農業専門学校教習	
山崎周蔵	新潟	長沙	湖南公立高等師範学校教習	
山下俊淵	愛媛	四平街	四鄭鐵路局事務員、四鄭総工程局事務員、会計課員、出納課課長	
山下與之助	京都	長沙	湖南中等農業学校教習	
山田勝治	福島	武昌	陸軍小学堂教習、陸軍学堂教習	東亜同文会報告:98号
山田好三郎	奈良	夔州	夔州府中学堂教習	
山田栄吉	大阪	南京	両江師範学堂教習	
山田孝次	宮城	杭州	予備陸軍三等軍医／軍医養成所教官	
山田勝太郎	秋田	長春	吉長鐵路局工務員	
山鷹一海	秋田	成都	通省師範学堂教習	
山名夕キ子	熊本	北京	北京内外城女学伝習所教習	
山中壽彌	新潟	保定	福井県技師／高等農業学堂正教習	
山根花	東京	北京	自流井私立樹人学堂教習	
山本菊次郎	東京	北京	陸地測量手／陸軍部測繪学堂翻訳官	
山本豊次	山口	成都	中学堂教習、成都中学堂教習	
山本三樹	石川	広東	金沢医学専門学校教授／両広陸軍随營新軍軍医学堂教習	東邦協会会報:132号
山本新次郎	和歌山	広東	鉄道技師／粵漢鐵路公司工程司、広東粵漢鐵路公司工程司	大阪毎日:1910年6月25日
山本徳光	石川	開原	石川県立農学校獣医科卒業／開原県顧問獣医	
山本新五郎	大阪	長春	満鉄工務員	
由利元吉	兵庫	四平街	四鄭鐵路局事務員、四鄭総工程局事務主任、代理会計課長、総会計兼処長	

横須賀辰蔵		武昌	輜重兵大尉／陸軍小学堂教習	東亜同文会報告:98号
横手義信	東京	四平街	四鄭鐵路局技師	
横山莊次郎	北海道	奉天	台湾総督府技師／農業試験場技師長	大阪毎日:1909年 10月6日 東亜同文会報告:80号
横山一治郎	千葉	太原	法政学堂	
横山春平	静岡	武昌	農務学堂教習	
横山鉄太郎	鳥取	杭州 北京	浙江病院技術員、京師伝染病医院研究部 技術員	
吉岡成	佐賀	北京	蒙古阿親王府鉱業技師	
吉岡実	徳島	天津	直隸学務所教習	
吉岡作一	広島	長春	吉長鐵路局営繕手	
吉岡龍作	新潟	奉天	満鉄監工	
吉加江宗二	宮崎	杭州	全浙兩級師範学堂教習	
吉川金蔵	東京	西安	高等師範兼法政学堂教習	
吉川壽次郎		武昌	一等軍医／軍医学堂教習	東亜同文会報告:98号
吉国半五	鹿児島	太原	山西優級師範学堂教習	
吉澤三郎		南京	民国法政大学教習	
吉田清一郎	岡山	杭州	浙江絞工所技手	
吉田信一	福岡	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司土木部員	
吉田忠真	栃木	南寧	陸軍歩兵中尉／南寧講武堂教習	
吉田義孝	東京	太原	山林技師／農業専門学校教習	
吉田時男	長崎	長春	吉長鐵路局課員、満鉄工務員	
吉田秀雄	広島	大冶	漢冶萍煤鉄鉍廠公司機械部員	
吉田喜一	大分	武昌	電気技師	
吉野作造	宮城	天津	北洋法政専門学堂正教習	大阪毎日:1909年 1月23日
吉弘則道		武昌		
吉村義行	岡山	北京	陸地測量手／陸軍部測繪学堂翻譯官	
米倉又記	宮城	保定	直隸中等農業学堂教習	
四戸友太郎	岩手	広東	歩兵大尉／虎門陸軍速成学堂教習	
老田太文	富山	奉天	京奉線技師、京奉鉄道技師長	東邦協会会報:132号
若井信次	群馬	天津	北洋官報総局	
若竹千代吉	熊本	奉天	農場試験場技手	
我妻孝助	宮城	天津	陸軍一等軍医／北洋軍医学堂教習	東亜同文会報

				告:107号
若松市治	熊本	福州	福州陸軍病院教習	
鷺見栄治	福岡	天津	歩兵少佐／北洋陸軍講武堂教習	
和田利	高知	長春	朝鮮鉄道技手／吉長鉄道技師	
渡瀬二郎	石川	天津 広寧 済南	砲兵中尉、陸軍砲兵中尉／北洋陸軍講武堂教習、陸軍第28師教習、陸軍部済南駐在弁事員、陸軍部軍務研究員	大阪毎日:1911年 4月24日
渡部達	福島	大冶	漢冶萍煤鉄鋳廠公司機械部員	
渡辺武夫	宮城	鉄嶺	清国衙門翻訳員	
渡邊龍聖	新潟	天津	東京高等師範学校教授／直隸總督府学務顧問	早稲田学報:146号 東亜同文会報告:92号
渡邊剛亮		武昌		
渡邊辰	埼玉	保定	陸軍工兵大尉／陸軍軍官学堂教官	
渡邊満太郎	広島	保定 北京	一等獣医、陸軍三等獣医正、陸軍二等獣医正、陸軍一等獣医正／保定陸軍獣医学堂教習、保定陸軍獣医学堂教習、陸軍獣医学堂教官	
渡邊善九郎	福井	長春	満鉄車房工務員	
渡邊喜一	愛媛	鄭家屯	満鉄社員／鄭家屯電燈公司主任技術者	
亘理寛之助	兵庫	南京	仙台陸軍幼年学校助教諭／両江師範学堂教習	大阪毎日:1908年 12月21日 東亜同文会報告:43号
和知時造	秋田	北京	東京海軍造兵廠助手／芸徒学堂教習、農工商部中等工業学堂教師	
和地永辰	京都	長春	吉長鐵路局會計主任	